



ラストーン

～失われた都より～

12

segakiyui

1. 使者

(神よ！ ラズーンの神々よ！)

神はとうにいないのだ、とユーノは知っていた。遙か太古にこの地を去り、ラズーンの滅びを見越して、なお生き延びると命じた神々は、既に神話と伝説の中に還り、この地に残っているのは、閃光にも似た儚い命を持つ人々の祈りと、神々の足跡だけ……。

それでも、ユーノはなおも祈りを捧げずにはいられなかった。

(守りたまえ。助けたまえ。せめて、この私を哀れと思って、私の生命を代償に、期限までに『泉の狩人』(オーミノ)の元へ行かせたまえ)

「は、あっ!!」

声をかけると、ヒストは、なおいきりたって速度を上げた。

セシ公の分領地を一路『氷の双宮』へ、ユーノは行程にして一日かかる距離を半日もたたずに踏破しつつあった。流れる汗に明け始めた空から吹いてくる朝風が冷たい。

(そして、できることなら、神よ、私の一撃がアシャの傷に響いていませんように)

呻いて倒れ込んできたアシャ、乱れ落ちた金の髪、苦痛に寄せた眉。

ユーノはあのときほど自分を哀しいと思ったことはなかった。

心の底から想って来た相手が傷ついているというのに、側に居てやれない自分、そして、その傷を抉るようなまねをするしかなかった自分。

(わかってる、ああしなれば、アシャはきっと自分で『狩人の山』(オムニド)に乗り込んだ)

そして再び冷たい山の中で、或いはまた冷酷無比な『泉の狩人』(オーミノ)の視線に囲まれて、命を落としていたかも知れない。

(そうだ、しっかりしろ!)

自分をきつく叱咤する。

確かに、ユーノが身代わりにならなければ、今度という今度は、アシャの命も危うかっただろう。そして、アシャが負傷していたからこそ、その弱みをついたからこそ、ユーノはアシャの身代わりになれた。もし、アシャがびんびんしていたら、ユーノごときの拳でアシャが気を失うわけはなかったのだから。

だがそれは、逆に言えば、アシャがそれほど弱っていたという意味でもあった。

(出血はしなかっただろうか。すぐに誰か見つけてくれただろうか)

叱咤した後から不安が湧き出でて、ユーノの心を激しく揺らせる。

(もしあのまま、冷たい廊下に倒れていたら？ 治りかけていた傷口が再び開いて、ううん、もっと深くまで傷ついで、止められないほど出血していたら?)

ダイン要城で、アシャが胸元を真紅に染めて倒れていた光景が甦る。

それは、セシ公のあの回廊で、今どくどくと血を流しながら倒れているアシャの姿となって、ユーノの脳裏一杯に広がった。薄緑色の石に映える鮮やかな紅に浸るアシャ、流れた血がところどころ黒く固まった頃には、体から温もりは奪い去られており、心臓は既に脈打つこともなく……。

「くっ」

ぶるっ、とユーノは首を振った。唇をきつく噛みしめる。

(もし、そうだったら……そうだったら、アシャ……)

流れ落ちてきた汗が目に入り、片手の甲で目を擦った。ひりひりした痛みにしばらく片目を閉じながらも、速度は緩めない。はあはあと忙しく乱れる息を整える間も惜しく、ヒストを急がせる。

「は、あっ! はっ!!」

(ううん、大丈夫だ)

必死に自分に言い聞かせる。

(ちゃんとセシ公に頼んできたか？ 彼がアシャを見捨てるわけではない)

風は朝独特の芳香を伴って、ユーノの顔に吹きつけた。草の匂い、微かに香ばしい樹々の薫り、どこか遠い街のざわめきが混じる。セシ公城下は既に遙か後方、目の前には『氷の双宮』の白い城壁が浮かび上がりつつある。

(今は、使者として、全力を尽くすのみ!)

ユーノがことさら急いだのには、もう一つわけがあった。

『狩人の山』(オムニド)へ入るには『氷の双宮』から抜けていくのが一番の近道なのだが、『氷の双宮』を囲むラズーンの内壁に作られた門は、四大公の召喚時にしか開かれない。その他の時は、よほどのことがない限り、外部から開くことはできない門だ。

だが、幸いにも、セシ公は、今日の朝、ジーフォ公が『太皇(スーグ)』に召喚されているという情報を手に入れていた。

『それに間に合えば、「氷の双宮」に入る事ができるだろう』

自分の主の住居に不法侵入するような勧めをぬけぬけと口にしたセシ公の声が、ユーノの耳の奥で響く。

「はいっ!」「わっ」「何だ!」

『氷の双宮』を囲む内壁の周囲にたっていた小さな市の中を、ユーノはヒストを蹴立てて走り抜けた。目指す門まではもう少し、壁に沿って回り込まなくてはならない。

「この…っ!」「乱暴者っ!!」「ごめんよっ!」

怒号の中を謝る間ももどかしく馬を駆けさせる。

(あそこだ!)

だがそれでも、ユーノが門に辿り着いた時は既に、ジーフォ公らしい騎馬が入り終え、扉が閉まろうとする直前だった。

「ヒストッ!」

掛け声一声、たじろぐ間もあらばこそ、強引にその隙間に飛び込んでいく。

「何者っ…」

ぎりぎりで扉の間を擦り抜けたユーノに、はっとしたように前に居た武者が向きを変えた。短い髪は細かく縮らせてあり、その下の太い眉、いかつい口許とともに、一目見て武官とわかる。これがジーフォ公だとすれば、ラズーンの四大公というのはかなり各々違った容貌が揃うのだろう。

「火急の用事、『太皇（スーグ）』にお会いする!!」

「ならんっ！」

間髪いれず、相手は叫んだ。ぎらぎらと闘志に燃える焦げ茶色の瞳がさっと彼女を一瞥する。年若い顔だが、その目には場数を踏んだ自信が伺える。

「貴様のような得体の知れぬ小僧を黙って通したとあっては、ジーフォ公はアギャンの腰抜けよりも阿呆と嗤われる！」

すらりと抜き放った剣は、朝の光を猛々しく跳ね返して、ユーノの目を射た。

「ここは俺を倒して通るがいい!」「!」

(くそっ)

ユーノは歯噛みして相手を睨みつけた。

構えからしても度胸からしても、相手はおそらくかなりの武人、剣を合わせれば貴重な時間を徒に食うだけだ。かと言って、ラズーン四大公の一人を切り捨てて通るといってもいかない。釈明するにしても、ユーノのことを頭から不法侵入者と決めてかかっている相手に、どこまでことばが通じるか…。

と、その時、もう一つの声が届いた。

「お待ち下さい、ジーフォ公。その方は怪しい者ではありませんよ」

「うむ?」「っ」

振り向くユーノの目に、短い直毛の金髪、深緑の目を輝かせた男が映る。

「視察官（オペ）ジュナ・グラティアス…」

(視察官（オペ）…?)

ジーフォ公の声に、ユーノは眉をひそめる。

一瞬、何か妙な感じを受けた。だが、それは捉えようとしたとたんに消え失せ、後にはどうにも説明し難い不快感だけが残る。

「その方はユーノ・セレディス。『銀の王族』で、ラズーンの『正統後継者』候補…」

「何?」

ジーフォ公がぎょっとしたようにユーノを振り返る。

(変だ…)

だが、ユーノは再び湧き上がった違和感に気をとられた。

(だけど、一体何が?)

答えは目の前にある。なのに、どうしても掴めない。

「そのような方が『太皇（スーグ）』に火急の用事とあれば、引き止めるわけにはいきませんまい」

「む…」

納得し切れない表情で不承不承頷いたジーフォ公から、ジュナはくるりとユーノを振り返った。

「ユーノ様、どうぞ、お早く」

「っ、ありがとう!」

我に返り、ユーノはヒストの手綱を握り直した。一声高く声をかける。

「行くぞ、ヒスト!」

待ってましたとばかりに走り出すヒストの背のユーノの頭には、既に『狩人の山』（オムニド）のことしかない。見送るジュナが執拗に見守っている気配はしたものの、その懸念も置き去って、ユーノは『氷の双宮』へとヒストを駆り続けた。

…………それは不思議な感覚だった。

寒いのに暖かい。四肢の先は凍えて痺れているのに、体はどこか仄温かく、その温もりはユーノを寛がせると同時に、なぜか不安にさせた。

(あ……あ…！)

唐突な恐怖が湧き上がって身もがく。声にならない悲鳴を上げて身悶えし、のたうち、闇雲にその場から逃げようとしたが、その恐怖は脚に絡みつき、体を縛り上げ、手首に食い込み、自由を奪い取った。激痛が心を切り裂いていく。ぐったりした四肢は、ユーノの意思に反応しない。

(あうっ…!!)

右肩に、背中に、脚に、目の眩むような灼熱の感覚が襲う。焼きごてを押しつけられたように、痛みはそこから体の隅々まで響き渡り侵していく。呼吸ができなくなる。必死に唇を開いても声が出ない。

ふっ、と視覚が戻ってきて、ほっとしたのも束の間、その視覚は青ざめたゼランの姿を捉えた。

(ゼラン…)

『恨みますぞ……幾度殺しても飽き足らぬほど…』

血に塗れた破れ衣の下の腕がぐっと盛り上がり、ぎらぎらとした剣を抜き放った。剣はしとどに紅に濡れ、濁った光はユーノの眼を鈍く抉る。

『幸いに……今……あなたは一人……』

ゆっくりと剣が振り上がっていく。逞しい腕が怒りに筋肉を震わせて差し上げられ、剣が逆手に持ち変えられる。左手が握りしめた柄を右手が支える。その右手は焼き焦がされたように煤けて、みるも無惨な傷を負っている。

その右手の様相に気づくと同時に、それまで単に青ざめていただけの顔の半分が、どろりと溶け崩れた。引き裂かれたように広がる口から蛆が零れる。

(っ！)

硬直するユーノの体はいつの間にか大地に貼りつけられ身動きならず、剣の真下の体を覆うのは裂けたチュニク一枚、その下には既に朱に染まった仄かな膨らみが弱々しく脈打つだけだ。相手の千切れ落ちそうな眼球がぎょろりとそれを見下ろし、歯を剥き出しながら、

『これ以上の……機会が……あろうか！』

亡者の叫びが闇を突いたと同時に、両刃の広い剣がユーノの胸を深々と刺し貫いた。

(はあうっ!!)

頭の中が空白になる。乾き切った喉が残っていた肺の空気を無理矢理押し出す。直後、引き裂かれ破れた喉が血を噴き出し、呼吸ができなくなってむせ返るユーノの胸に、なおも剣を突き立てたままのゼランが、にんまりとほくそ笑む。

『すぐには……死なせぬ……』

その顔は、ゼランからギヌアに、そしてカザディノの脂ぎった醜い笑みに次々と変わった。剣に力が籠る。ずぶっ…ずぶっ…と胸の奥深く背中めがけて食い込んでいく刃先が捻り込まれるように動いて苦痛を広げ、気を失うこともできない。誇りにかけて悲鳴を上げるまいと食いしばった口も、激痛に頼りなく開いていく。

(あ……う…)

朦朧とする意識は体の制御力を放棄した。咽せてごふりと吐いた血は生暖かく、冷えた口許を濡らした。胸の剣はついに背中に到達したのだろうか、流れ続ける血が全身を濡らしている。

亡者の姿はもうなかった。剣に串刺しにされたユーノが悶え苦しむ姿を、どこかの闇で眺めているのか。

(寒いのに……暖かい…)

ユーノは夢と現の間に漂っていく自分を、他人事のように眺めていた。四肢の先には感覚がないのに、鮮血に塗れた体幹だけは暖かい。凍えていきそうなのに、次第に遅くなっていく拍動が絞り出す血液が、無駄に体を温めていく。

(死ぬんだな…)

それは不思議な感覚だった。心のどこかがほっと吐息をつく。不安に揺れながらも、その底、心の微かな襲の奥には、微かな安堵があった。

(いいん……だね……)

どこへともわからぬ問い。

(もう…眠っても……いいね……？ …私……ずっと…眠り……たかった……んだ……何も知らずに……何も考えずに……そうだ……ずっと眠りたかった……)

ほんの少し溜め息を吐く。眼を閉じる。

だが、意識を手放しかけたその瞬間、ふっと耳元に聞き慣れた声が響いた。

「ユーノ」

(アシャ?!)

はっとして眼を見開く。予期していないほど間近にアシャの顔があって、一瞬息が止まった。

「俺を置いて行く気か？」

形のいい唇がゆっくり、そうことばを紡いだ。呆然と相手を見つめているユーノの感覚が、今までと違った情報を流し込んでくる。

体の暖かさは血のせいではない、アシャが素肌のユーノを抱き締めているのだ。手足が冷たいのは、アシャに両手首を押さえつけられ、脚も絡まれているからで、胸の拍動が鳴り響くのは触れ合ったアシャの鼓動のせい、口許が暖かく濡れたと感じたのは、アシャの唇がそっとユーノの唇に重ねられていたせいだ、と。

(これは夢だ)

「ユーノ」

(これは夢だ)

「俺を見忘れたのか」

(こんなことがあるはずがない)

「今まで抱いてただろう？」

(これは夢…だ)

「ユーノ…」

ふっ、と悩ましげに口を閉じ、眉を潜め、アシャは紫の瞳を曇らせた。たゆとうような色をたたえ、長い睫毛を伏せて、ユーノの頬から耳へと唇を滑らせ、低く囁いてくる。

「どうしたんだ…？ ユーノ…」

「あ…」

ふつり、とどこかが切れた。

それこそは、ずっと待ち続けていたことばだった。ただ一回、それで良かった。ただ一回、ユーノの顔を真摯に覗き込み、「どうしたんだ」と尋ねて欲しかった。そうすれば、この、心を縛った縛めが切れるのだとわかっていた。

「あ…あ」

「ユーノ？」

「ア…ア…シャ…！」

自由になった両手を引き抜き、涙をぼろぼろ零しながら、ユーノは一声、その名を呼んだ。自分を抱き締めるアシャにしがみつこうと相手をかき抱く。

「た…すけ……っ!!」

ざくっ…。

両腕に痛みが走って、ユーノは息を呑んで仰け反った。強く閉じた両目、閉ざされた視界でもわかった。両手は中空に浮いたまま、そればかりか仰け反ったせいでお、ずぶ…っ、と胸に刃が突き刺さる感覚があった。

「う…」

喘ぎながら薄く目を開け、相も変わらず胸に深々と突き立った剣と、それを抱き締めかけて、刃に食い込まれた両腕が映る。

(ま……ぼろ……し…)

どこからか、耳を覆いたくなるような哄笑が聞こえてくる。

何を望んだ。

哄笑は、そうことばになった。

何を夢見た。

嘲り笑いながら、誰かが尋ねる。

分不相応なその身で。

「ふ…ふっ…」

ユーノは微かに嗤った。閉じた瞼の下から、流れ損ねた涙が血に汚れた頬へと伝い落ちる。

「は、はは…っは……」

自分の嗤い声は響く哄笑と入り交じり、痛いほど鼓膜を叩き続けた……。

「、ふっ…」

詰めていた息を吐いて、ユーノはぼんやり眼を開けた。

冷えきった額の『聖なる輪』(リーソン)がきつく締めつけてきて我に返ったらしい。ぶるっ、と小動物のように頭を振って、ユーノは辺りを見回し、どこに居るのか思い出した。

周囲は雪、さらさらと風に舞い散る雪の斜面で、雪溜まりに脚を突っ込んで体勢を崩し、そのまま転げ落ちてしばらく眠り込んでしまっていたらしい。

(『狩人の山』(オムニド)…)

ユーノは凍てついた四肢をのろのろと引き抜こうとした。チュニックも羽織っていたマントも既にびしょぬれになっている。怪我はしていなくとも、このままぼやぼやしていれば、凍死するのは目に見えている。

「……」

ユーノはそっと『聖なる輪』(リーソン)に指を触れた。吹きつけてくる風に目を閉じ、意識を遮断する。心を指先に集めて、『聖なる輪』(リーソン)の中へと循環させる。

風の冷たさを感じなくなってくるのと入れ代わりに、脳裏には二日前の出来事が甦ってきていた。

「『狩人の山』（オムニド）へ？」

『太皇（スーグ）』は一瞬、自分の耳を疑うように玉座から身を乗り出した。

『氷の双宮』は以前と変わらず静まり返り、『太皇（スーグ）』の声の隅々の音色を反響させる、疑いと不安と、密やかな感嘆を。

「はい」

玉座の前に片膝を突いて礼をとったユーノは、じっと床の上を見つめながら低く応えた。

「アシャの代わりに向かうというのか」

「はい」

「そなた一人で」

「はい」

同じように、幾人もがここで、自分の決意を確かめられただろう。

それら先人の意志と同じぐらい、自分の心が強固に練り上げられていると伝わるといい。

ユーノの淡々とした声に、『太皇（スーグ）』は重い溜め息をついた。

「……『泉の狩人』（オーミノ）のことは知っているのであろうな」

「はい」

熟知しているわけではない。

けれど、踏み込む。

その先にあるものを手に入れるためには、こんなところで怯んじゃ駄目だ。

「彼らは荒廃の世に生を受け、時の『神』の命に寄って、我らに力を貸しはした。だが、元々は我らにも『運命（リマイン）』にも属さぬことを誇りとする一族、わしの願いを聞くのも、神の命じた『太皇（スーグ）』に敬意を払ってのこと、わし個人に向けられた忠誠ではない」

時を越えて生き抜いてきた老人の声は、憂いに満ちて呟いた。

「アシャが彼らへの使者を務め得たことさえ法外なことなのだ。その『泉の狩人』（オーミノ）の所へ、一人で、しかも使者を成り代わって行こうというのか？」

「はい」

ユーノは、弾けば響く立風琴（リュシ）のように、軽々と応じた。

「わかっています。使者とはいえ、『泉の狩人』（オーミノ）に気に入られなければ岩とかげよりも易々と屠られることも、道案内とされるシズミィのことも、人の生を呑み込む聖なる『狩人の山』（オムニド）の恐ろしさも」

まばたきする一瞬だけことばを止め、

「けれども、私以外に、誰が今、動けますか？」

相手の喉元に切っ先を突きつけるような声だと感じた。

しばらく沈黙が続く。

応えあぐねているというよりは、冷静に現実を見極めている『太皇（スーグ）』の気配に、少し安堵する。

「身勝手をお許し下さい、『太皇（スーグ）』。せつかく『聖なる輪』（リーソン）を頂きながら、その命を投げ捨てるようなことをする私をお許し下さい。そして、私が無事に帰った暁には」

故郷を出る時には、統合府ラズーンの長を相手に、こんな交渉を持ちかけるような状況など想像もしていなかった。それは天に向かって槍を投げるようなもの、風に抗して矢を放つようなもの、凄まじい力に打ち倒されて我が身を滅ぼす類の暴挙のはずだった。

だが、今のユーノは対等ではないにせよ、『太皇（スーグ）』の抱える傷みを知り、ラズーンの裡深く彫り込まれた約定を理解している。それに対して果たすべき責務を僅かでも背負い、それらを呑み込んだ上の自分の願いも自覚している。

セレドを発った時の、隣国の侵略からただただ自分の国や家族を守りたいだけの感覚を越え、もっと大きな仕組みの中でどうやって生き延びていくか、どうすれば自分のささやかな願い、愛しい人に幸福に笑っていて欲しいという祈りを叶えることができるかを考え始めている。

巨大な歴史の歯車の中で、踏みつぶされていくしかないこの命でも、何ができるのか、何を望むのか、それをするとき、ユーノの胸の中には、あの『氷の双宮』を保とうとした人物の覚悟が沁み渡る。

この小さな手は、何も救い得ないのかも知れない。

けれど、けれど。

幻のような命であっても、なお。

最後のときには満足したいじゃないか、なあ。

何かを成し遂げたという満足じゃない。

いつでも逃げられた、安全圏に引っ込めた、けれど、振り返ったその先に、小さな子どもが泣いていた、だから駆け戻って地割れに呑み込まれてしまった、そういう人のように。

私は、私を裏切らなかつた、そう思って死にたいじゃないか。

（アシャ）

唇を噛み、目を閉じる。

（あなたを、護る）

「……『泉の狩人』（オーミノ）の協力はなくとも、『運命（リマイン）』にはつかぬとの誓言あった暁には…叶えて頂きたい願いがございます」

「何じゃ？」

「それは……まだ…」

口ごもるユーノを見つめていた『太皇（スーグ）』は、白い眉を緩やかに開いた。静かな瞳で彼女を見下ろす。

「ユーノ」

「はい？」

問いかける口調に顔を上げる。

「そなたは、強い娘じゃな」
ぴく、と思わず肩が震えたが、ユーノはまっすぐに『太皇（スーグ）』を見返した。
自分の瞳の中には怯えもためらいもまだあるだろう、自己憐憫も恐れも満ちているだろう、それらをすべて読み取られても構わない。
（魂よ、我が信頼に応えよ）
しっかりと目を見開くと、ひとりでに唇が綻んだ。
もう迷わない声が応じる。
「はい、『太皇（スーグ）』」

『太皇（スーグ）』はミダス公の屋敷に置き去りにしてきた『聖なる輪』（リーソン）の代わりに、新しい『聖なる輪』（リーソン）を授けてくれた。

そしてユーノは、幾日分かの水と食糧を手にも、『狩人の山』（オムニド）へ踏み込んだのだった。

（後、五日）

目を開き、左手首に通した銀の輪を見つめる。残った輪は後二本と半分、後は全て鈍い茶色に変色してしまっている。

「ふ…」

きゅ、と唇を引き締め、雪の中に埋まり込んだ脚をゆっくりと引き抜き、前進を再開する。『聖なる輪』（リーソン）のおかげで少しは体力を保持できるものの、体の奥底には濁った疲れがたまっていて、一步進むたびに、体の中をあちらへこちらへと流れていく。

数歩進んだだけで、額には汗が滲み、呼吸は荒くなり、白い息が視界を漂った。

（よくこんな所を、アシャは行ったな）

行けども行けども変わらぬ景色は、想像以上に人の心を摩耗させる。体の疲弊と相まって、それが再び気怠い放心状態を作り出す。

脚を引き抜き、引掛かる。数回動かして少しずつ抜き、ほんの僅か離れた積雪の上に降ろす。脚はすぐにずぶりと頼りなく沈んで、少しも浅くならない雪原を思い知らせる。

（進んだ気がしない……それでか、あんな夢を見たのは）

自分が見る夢は、いつも切ない夢ばかりだ、と思う。

幼い頃からそうだった。痛みと疲労に気を失うように眠り込んでみる夢は、どれもこれも心を切なく絞り上げる。

精一杯伸ばすのに届かない手、走っても走っても追いつかない後ろ姿、救いを求めて見回した周囲には闇色の空間、そこに潜むのはいつも、隙あらばユーノの心を喰い散らかそうとする魔の気配だけ。

悲鳴を上げて飛び起きてみれば、誰もいない冷えきった部屋、人恋しさに枕を抱いて皇宮の中を彷徨えば、母はいない、父もいない。ああ、確か今日は夜通しの宴だったと思い出してレアナを探せば、ベッドで心地良さそうに熟睡している姿…。

姉…。

呼びかけかけて、響いた声の大きさにどきりとして口を噤み、起こしてしまったのかと相手を覗き込み……そのまま、声もかけられず、立ち去ることもできず、薄い夜着で震えながら、その場にずっと立ち竦んでいた。

（魂の強さを悔やむまい、心の雄々しさを哀しむまい……あれは、何の唄だったかな）

自分のことを歌ったようだと思って、きっとこういうことは、誰にでもあることなのだ、自分一人のことではないのだと言い聞かせて。

それでも時折、切なさは嵐のように心を襲って、一人立つ決意を滲ませる。

「ふう……っ！」

額の汗を拭って立ち止まったユーノは、ふいに突き刺さるような殺気を感じて振り返った。同時に、眼前にふわりと音もなく舞い降りた銀青色の影が広がる。

「っっ!!」

ザッ!

とっさに雪に呑まれた体を投げ出し、かろうじて金の爪を避けたものの、左腕を軽く擦られ顔を歪めて雪上に転がる。右手で腰の剣を引き抜き、体勢を整えて身構えるや否や、軽々とユーノを飛び越えた銀青色の獣は、深い雪の中、まるで体重がないように空中で体を捻り、ユーノに相対して舞い降りた。

冷やかに細めた瞳は、宝石のような金と青の色違い、長い尻尾をゆっくりくねらせてユーノを正視している。

。（飛びかかってくるまで、気配がなかった）

ごくりと唾を呑んで、剣の柄を両手で支える。空気がぴりぴりと痛い。寒さよりも数段鋭い、殺意の刃だ。

（聖なる山の道案内、シズミィ）

その名は昔語りの中に生き、夜に語り継がれる多くの古老の話の中でも、一際異彩を放っている。

獲物の生き血を啜り、死を願い生を危うくすることを至上の使命とする天性の殺し屋。雪の夜には、血を求め、風に紛れて人里を襲うという話も、ラズーンの中で何度も耳にした。

（敵にするには無謀なほど厄介な相手）

冷たい心の持ち主である『泉の狩人』（オーミノ）は、この獣の美しさと凶暴さを愛で、選んだ客のためにも、シズミィを迎えに放つ。だが、シズミィは単に『泉の狩人』（オーミノ）への道案内であるだけではなく、客の力量を試す役割も与えられていると聞く。

風はいつしか止んでいた。

静まり返り、生き物の気配さえない『狩人の山（オーミノ）』で、睨み合ったユーノとシズミィの周囲では、時間さえも止まってしまったかのようだ。

「……」

どれほどの時間がたったのだろうか。

シズミィは周囲に溶け込むような淡い銀色の体に、僅かな朱みを加えた。沈んだ銀青色の水盤に張った水に、一滴二滴鮮血を滴らせるように、淡い桜色に身を染めていく。

ゆっくり、一步、前足を雪の上に置いて体重を移した。

続いてもう一步、ユーノの方へ身を進める。

完全に体重を消しているのか、その足跡は、ユーノがふくらはぎまで埋まっている雪上に、花卉が舞い落ちたほどの深さでしか残らない。

緊張感に身を引き締め、剣を握りしめるユーノの掌には、いつしかじっとりと粘りつくような汗が滲んで来ていた。

(アシャで五分五分……私なら……もって四分六……まずくすれば七分三分…)

シズミィが低く身を伏せた。渾身の力を体に溜める。

ユーノも息を吐いて剣を構え、目を細める。

空気がぎりぎりと捻り上がった。

「ふ、…うっ！」
「起き上がらぬ方がいい」
水底から浮かび上がってきた泡が弾けるように、深い息を一瞬に吐いて薄く目を開けたアシャは、次の瞬間跳ね起きようとして、左胸の抉られたような痛みにも呻いき、体を仰け反らせて沈み込む。
何が一体起こったのだ、その思いは甦った記憶に一気に溶ける。
(くそっ……ユーノの奴!!)
周囲にあるものをあれこれ構わず殴りつきたいような、凶暴な感情が爆発する。下唇を噛み、無言で心と体の激痛に耐えていたアシャの耳に、最初に制したどこか艶のある声が再び届いた。
「あなたは二日や三日で動ける傷ではないですよ」
「……」
明るい陽射しの中、ベッドに横たわったまま、アシャはゆっくりと声の主の方へ顔を向けた。相手は、部屋の南の窓枠に片腕を預けて軽く寄りかかり、引きずるほど長い衣を纏った体を滑らかな動きで振り返らせる。今まで光に照らされて頬の白さしか見えなかった顔が、影を帯びて端整な面立ちに切り替わる。
「…セシ公」
重い溜め息とともに呟いて、アシャは全てを理解した。
では、あの、こまっしゃくれた、自信過剰の、無鉄砲で死にたがることしか考えない『クソガキ』は、アシャを当て身で倒した後のこともしっかり配慮していったというわけだ。
「その様子では…」
セシ公は、年若い妙に表情の読めない目に笑みを浮かべ、ことばを継ぐ。
「何があったか、おわかりですね？」
「ああ」
我ながら苦々しい声、唸るように応じて、体に掛けられていた白い布から片手を抜き出し、額から後ろへ乱れた髪をかきあげた。
「わかっている。ユーノは…」
正直なものだ、詰るつもりで口に出した名前だけで、声が心配を宿す。
「もう行ったのか」
「はい、昨夜のうちに」
知っていたのならどうして止めなかった、そう怒鳴りつけそうになるのを逸らすために、旅路を急ぐ少女の姿を思い描く。
(ユーノのことだ、もう今頃は『氷の双宮』に辿り着いているはず……いや、『狩人の山』(オムニド)に入ったか)
目まぐるしく回転していく思考と同時に押さえ切れぬ不安が、澄み切った水に落とされた染め粉のように見る見る心を曇らせていく。
(どうして、無茶をする)
まるで傷みなど知らないような顔で。
(どうして俺を置いていく)
奥歯を噛み締め、目を閉じる。もちろん、今回は自分が傷を負ったことがへまの大元だ、それはわかっている、だが。
(俺の方がもたない)
ユーノが引くわけがない、たとえ『泉の狩人』(オーミノ)を前にしようとも。そして、『泉の狩人』(オーミノ)はそういう『跳ね上がった子ども』を好まないのに。
(なぜわからない)
唇から溢れそうになる、年甲斐もなく、恥も外聞もなく泣き喚きたくなる。
(お前の屍体を抱くなぞごめんなんだ、おれは!)
それぐらいなら、ユーノとともに百万の軍勢に向かうほうが余程気楽だ、背中にユーノを庇ってさえいれば、アシャは指一本になっても戦い抜ける。
(お前はおれの主人だろうが)
なのになぜ、主が従者の先を往く?
「く…そ…っ」
がしりと前髪を掴んだ。
わかっている、それがユーノだ、だからこそ惹かれ、だからこそ従い、だからこそ命にかえても守ろうとする……だが、この主は差し伸べ懇願する手を軽々と越えて駆け去ってってしまう。
(なぜ、わからない!)
「アシャ・ラズーン」
「……」
静かに声をかけられ、我に返って手を放した。振り向いて、セシ公にしては、珍しく驚くほど無防備な感情を出した目でこちらを見つめているのに気づく。
「あの子は、一体どういう娘なのですか？」
アシャは僅かに眉を上げた。無言の促しに、セシ公は憂いを浮かべてことばを続ける。
「ご存知の通り、私もラズーンの情報屋と呼ばれた人間、通り一遍の人間は見て来てはいるが」
困惑を響かせる声に、アシャは無意識に唇を歪める。
「だが、あんな娘……あの若さであそこまでの覚悟と腕を備えている……それも、少女、というのは今まで見たことがない。一体、彼女はどのような育ち方をした娘なのですか？」
「……常に誰かを護ってきた娘だよ」
胸の底に甦るユーノの視線、ほんの数回しか見せることのなかった、何かを捜し求めてすぎるような瞳を思い出す。
あれは、何を探していたのか。

「誰かを護ることしか知らない……自分もまた護られるに価するのだとは、思いもしない娘だ」
傷に一人で唇を噛んで耐える。細い体に一生消えぬ傷痕を幾つも刻みつけられてもなお、華奢な両腕を伸ばせる限り伸ばして、ただひたすらに愛しい人々を護ろうとする。

『ボクはね…』

遠い声が鼓膜の底で聞こえる。

『姉さま達が好きなの、セアラが愛しい…』

どこまでも続く緑の草原の中、青空の彼方の地平にじっと瞳を凝らしながら語る、淡々とした声。何を見ているのか、何を探しているのか気になって、隣で一緒に地平を見つめていた。

『だから護りたいんだ……それだけ、なんだ』

ボクという男ことばには違和感がなかった。それでもその一人称にはひどく寂しい響きがあって、思わずユーノを見やると、吹き過ぎる風に焦茶の髪をなびかせ、地平よりもなお遠くを眺める目になって、

『それだけなんだ』

ぽつりと一言、繰り返した。

それがまるで自分に言い聞かせてでもいるように深い翳りを帯びていたから、アシャは思わず問いかけようとした、じゃあ、お前は誰が護ってくれるんだ、と。

もちろん、アシャの中では応えは決まっている。

だがそれを口にする前に、レスファートがユーノを呼び、いつもようににこりと笑ってユーノが応じ……それきり尋ねる機会を失った。

(誰かに護ってもらおうとは考えないのか。そうしてずっと、一人で生きていくと決めてしまっているのか)

いつかの問いに、ユーノは迷うような瞳でアシャに尋ね返したことがあった、「誰に？」と。

(俺では駄目なのか。お前の探している相手じゃないのか。おれはお前の見ている光景の片隅にも入っていないのか)

こんなふうに、邪魔な障害物のように殴られて置き去られていくなら、大抵の男は考えるだろう、消えてしまえと言われていたんだろうと。自分の行く手を遮るな、と。

(俺はお前の何なんだ？ ただの旅の道連れか？ イルファやレスファートよりも遠い存在か?)

キスに抵抗しなかった、と思う。それを、自分への好意ととっていたのは、アシャの独りよがり、自惚れでしかなかったのだろうか。それともあれは、挨拶や謝礼がわりであって、ユーノは努力して『礼儀』を果たしてくれていたのか。

(……そうか……ユーノから、おれにすがりついてきたことなんて…なかったな)

そればかりか、アシャが差し伸べた手さえ時に邪険に拒んで、意識がある時は決してアシャの腕に身を委ねようとはしなかった。幾度も襲った命の危機にも、アシャを呼ぶことはほとんどなく、ただ無言で耐え抜くばかりではなかったか。

(おれは、お前が身を委ねるには……価しない、ということか……?)

ユーノに仕えている、いざとなれば、主の前に我が身を晒して護ることも厭わない従者だと自負していたのは、まるっきりアシャの妄想でしかなかったのだろうか。

ならば。

(どんな奴になら……身を委ねる、ユーノ)

じりじりと身をこじ開けるこの闇の炎は、自分が足りないと思った瞬間にこそ燃え始めるのだ、と気づく。

(おれ、ではなくて、)

「そうですか」

「っ」

セシ公の声が響いて、アシャは息を呑んで瞬きした。視界が薄暗く眩んでいたのによりやく気づき、ついで、自分が部屋に居るセシ公の存在を全く無視していたのにぎよっとする、ラズーンのアシャともあろうものが。

(俺は)

「では、アシャ・ラズーン」

セシ公もセシ公で非常に稀なこと、アシャの反応よりも自分の思考に没頭していたらしい。引き続き、考え込んだ顔で陽光跳ねる外庭に視線を向けながら、

「もし、自分一人と配下五人、生き残る機会が五分五分だとしたら、それでも配下の方を護る人間でしょうか」

娘、が、人間、に変わった。

「ああ、もちろん」

アシャは苦笑した。

「いや、たとえ、自分一人と配下一人が五分五分の確率で生き残れるとしても、あいつは配下を救いに走る」

(そうだよな)

それは愚かなことだ、戦略的にも現実問題としてもやってはならないことだ。

だが、『そうしてくれる』と知るからこそ、たとえユーノ一人でも生き永らえることができるようにと、周囲は粘る、頑張る、ぎりぎりの状況をしのぐ。いざとなればユーノが駆けつけてくると『知っている』から、自分にはとても越えられないと思っていた限界を、這い上がり蹴り崩し飛び出していける。

そうして周囲は戦いを終えて、自分に向けられた誇らしげなユーノの笑みに気づいてわかるのだ、ああ自分はまた大きくなった、と。

(今ここで、命を賭けて悔いはないと確信できる)

そして、その自分の成長を共に喜び、誇りに思ってくれ、楽しみにしてくれる、あの瞳の前で、自分もまた自分のことを、どれほど誇りに思い信頼できるか。どれほど満足し、愛せるか。

(ああ…そうか)

アシャはふいに切ないほど強く理解する。

(だから、おれは)

ユーノが欲しかった。ユーノに支配されたかった。ユーノの側で、自分の中で縮こまり竦み、満たされないまま成長を止めてしまった存在を見つけて、それを育て上げ、認めてもらい、愛したかった、自分自身で。

(あいつは……ユーノは……おれにとって、長、なんだ)

ならば、当然ではないのか。

衝撃に一瞬目を閉じる。

アシャは、いやアシャもまた、ユーノを『護るべき存在』としては見ていなかったということだ。

レアナのように、セレドの皇宮の人々のように、アシャもまた無意識に、ユーノを自分の生きる拠り所としたということだ、それを背負わされる苦痛を十二分に理解しているはずのアシャが。

最終最後では、自分が一人、戦わなくてはならない。

ユーノは、そう『知って』いたはずだ。

アシャは、ユーノの『付き人』なのだから。

決戦に出向くのは、従者ではない、主であるのは理の帰結。

(わかっていなかったのは、おれ、か)

だからこそ、この、事態。

(おれ、は)

何と情けない男なのか。

「く…」

怒りに視界が眩んだ。体中が泡立ち、自分の愚かさに自らを粉々にしたくなる。

(当然だ、何もかも、当然なんだ)

セレドの世情不安はラズーンの制御力の低下が引き起こしている。

だが、その根本に座すはずのアシャは、ラズーンの統治責任を放棄し逃げている。

ラズーンに戻ることをユーノが選択し、それに付き従って引き戻されることをアシャが選んだのは、愛情でもなんでもない、彼女の強さに従えば、責務を果たせるとどこかで察知していたからだ。

同様、旅の空の下、いやラズーンに戻ってからさえ、ユーノに忘れ去られ置き去られることにあれほど怯えたのも、恋でも何でもない、自分一人では崩壊しつつある世界を支え切れないとわかっていたからだ。

だから。求めた。

(好きだ？ 愛している？ 大事に想う？)

くそくらえだ。

それは自分の安全を保障し、未来を救ってくれる身代わりだからだろう。

生まれた意味を抱え切れず、突きつけられた現実を受け止め切れず、そんな自分の弱さや脆さを認めることさえできない男が、手に入りやすくよく動いてくれそうな人形の一つ見つけた、そういうことではなかったのか。

そして、その、アシャの奥深くにある『狡さ』を、おそらくユーノは気づいていた。

(お前は逃げなかった、ものな)

理不尽な状況から、ただの一度も逃げることなく、全てを背負い切ってきたのだ。数々の裏切りを重ねられても、なお人への信頼を失わなかったのだ。

その生き様が暴いたアシャという男は、どれほどみっともなかったことだろう。

胸の底から崩れていくような虚無感。

(なのに、今もまた)

ユーノはアシャの身代わりに『狩人の山』(オムニド)に一人向かっている。

(こんなおれからも、お前はまた逃げずに居てくれる)

ならば、アシャは。

「……それならいい」

セシ公が眩いたのに目を開ける。ぼやけている視界に、薄く笑みを浮かべたセシ公が映る。

「醒め過ぎている統率者よりは、熱い魂を押さえ切れない方が、王としては好ましい……参謀としてのやりがいもあるというものだ」

「……どういう意味だ」

アシャはセシ公の淡々とした顔を凝視した。

(ああ、こいつも)

予感がある。

「どういう意味とは？」

「ラズーンの情報屋としての名前を知らないとは言わない。ユーノに付いて、どんな得があるのかとも尋ねない。ただ聞こう、『セシ公』としては、何を狙っている？」

「人間の悪い」

くくっ、とセシ公は忍び笑いをした。薄い唇が皮肉っぽく歪む。

「名高いアシャ・ラズーンはお見通しというわけですか」

「……」

名前なんぞ意味がない、そう吐き捨てたくなる。

「私は単に、あの少女が気に入ったんですよ」

楽しげな声が応じる。

「あの娘が、この争乱の世をどう生きていくのかが見たい……だが、それだけの理由では納得してもらえそうにありませんね」

アシャは視線で無言の圧力をかける。

「では、ラズーンの情報屋として言いましょう、アシャ・ラズーン」

淡く陽を透かした茶色の瞳が、促しに応じて細められる。肘を窓にかけたまま、寛いだ様子でセシ公は続けた。

。「まだ噂程度の情報ですが……『運命（リマイン）』に降りた大公がいる」

軽く肩を竦めてみせる。

「少なくとも私ではない。今動くには時期尚早ですから」

聞きようによっては物騒な台詞をことごとく舌に載せた。

「となると、アギャン公、ジーフォ公、ミダス公のうちの誰か……」

猛々しい光を満たしているはずのアシャの瞳を苦もなく見返しながら、

「だが、問題はそんなことではない。ラズーンの四大公のうち一人が、完全に『運命（リマイン）』に回ったということ。つまり、こちらの手の内をよく知っている人間が敵側に居る、ということ」

にっ、と不敵な、なのに艶かしさのある笑みが、セシ公の唇から零れた。

「軍師としては、これ以上に、己の力量を試せる機会があるとは思えませんね。それに、あの少女の下にいるなら……」

微かに瞳を伏せると、一層、恥じらった少女のような妖しさが広がる。

「滅びも敗北も、それなりに楽しめようというもの」

す、っとセシ公は体を落とし、床に片膝を突いた。

「どうか、アシャ・ラズーン。私をユーノ殿の参謀としてお加え下さい」

(やっぱり、か)

また一人、アシャにとって手強く腹立たしい相手が増える。

アシャの表情を見て取ったのだろう、上目遣いのセシ公が薄く笑む。

「まだ何か？」

「……いやがらせか」

自分がユーノにとって最低最悪の付き人風情だったということを実感したこの状況で、何と不愉快な申し出か

。「まさか」

セシ公はふんわりと笑みを深めた。

「ユーノ殿のご無事を願えばこそ」

ユーノの無事。

(ああ、確かに)

アシャもまた、そこから始めるしかないのだろう。

溜め息を一つつく。

「俺はユーノの付き人だ」

苦い声が混じらなければいいと思いながら口にしたが、セシ公相手には無駄だったようだ。返答を予想したのだろう、笑みを消し、深々と頭を下げる聡明さがむかつく。

「主人が許可したのなら、背くわけにはいきまい」

ユーノがアシャのことを頼んでいくほどの信頼を与えたのだ、アシャが拒むことなどできない。

(ユーノ、おれは)

頭を下げたセシ公の頬に、風に吹かれた淡い金の髪が白く光を跳ねて乱れる。それを見つめながら、遠く先往くユーノの背中を想う。

(お前は一体、いつまでおれを待っていてくれるだろう…?)

アシャは胸の塊を静かに抱えながら目を閉じた。

『狩人の山』（オムニド）の頂上近くに建てられた神殿は冷気に満たされている。冷えて凍え、命ある者は、そこで永らえることは叶わない環境だ。

だが、『泉の狩人』（オーミノ）達はそこを居城としていた。世界の惑乱も、人々の嘆きもここには届かない。

彼らはとっくに絶望しているのだ、自分達の存在にも、人の世の在り方にも。

「ウォーグ」

神殿の中、呼ばれて振り返った『泉の狩人』（オーミノ）の一人、ウォーグは、近づいてくるセールを認めた。栗色の艶やかな直毛を優雅な仕草で肩から払って相手を待つ。しなやかな足取りで近づいたもう一人の狩人は、表情のない白骨の顔の代わりに、声に面白そうな響きを含ませた。

「シャギオは？」

「それが見つからないのだ。どこかで餌でも探し歩いているとは思うが」

ウォーグは静かに首を振る。

「餌探しも餌探し、面白い贅を相手にしているぞ」

セールの声は楽しげに応じた。

「何？」

「まだ年若い少年じゃ。何を血迷ったか、『狩人の山』（オムニド）に踏み込んだところを、シャギオに見つかった様子は、今、長が水鏡（カーフィ）でご覧になっている。そなたに確かめよとの仰せだ」

「それは面白い」

『狩人の山』（オムニド）が聖なる場所であることは、ラズーンは元より諸国にも伝わっていると聞く。寒風吹きすさぶ峻厳な山々に、好んで踏み込もうとする者などいない。ましてや、ここは『泉の狩人』（オーミノ）支配下（ロダ）であり、ラズーンの『羽根』どもと言えども、迂闊に足を踏み入れない。

「少年か？」

「おお、ほんの子どもだ」

セールに連れられ、ウォーグはいそいそと、蒼白く輝く、磨き抜かれた石畳を飛ぶように、奥まった一室に向かった。

神殿の一番奥、何本もの巨大な支柱の立ち並ぶ果てに、四方を石壁で囲まれ、青水晶をはめ込んだ天井の窓からのみ光が差し込む小部屋があった。つやつやした柔らかな毛足の黒い布で周囲の壁が覆われ、数多くの襷に夜を潜めるその部屋には、中央に腰までの高さの机があり、その真ん中を八角形に彫り込んで水を溜めてある。八角形の水盤は細やかな飾り細工で囲まれていた。

『泉の狩人』（オーミノ）の長ラフィンニは、今しも、念を凝らして、じっとその波一つたない澄み渡った水の表面を覗き込んでおり、周囲に集まった『泉の狩人』（オーミノ）達も、それぞれ思い思いの姿勢で水鏡（カーフィ）を見つめている。

「おお、ウォーグ、来たか」

「お呼びに」

長はウォーグが青い衣の裳裾を素早く捌いて近寄るのに顔を上げ、楽しげに続けた。

「これは、そなたのシズミィ、シャギオと見たがどうじゃ」

「はっ」

ウォーグは長ほどの遠視力はない。しばらく目を凝らしながら無言で覗き込んでいたが、やがて静かに顔を上げ、

「確かにこれは、私のシャギオめでございます」

「よく見回ってくれるものよのう、早々にあの者を見つけ出しおった。まだ子どもじゃが、『狩人の山』（オムニド）の噂を知らぬとは言えぬほどの年嵩、何に眩んで聖域に入り込んできたのやら」

「長！」

それまでじっと水面を見つめていたセールが、はっとしたように声を上げた。

「この者、『使者の輪』をしております」

「何？」

訝しく、改めてラフィンニが水鏡（カーフィ）を覗き込むと、確かに少年の左手首には銀色の輪が光っている。

「誰か、このような子どもに、『使者の輪』を与えた者はいるか？」

「……」

問いかけに、『泉の狩人』（オーミノ）達は応えない。困惑した気配で互いの顔を見合わせるうちに、一人の狩人が歩み出た。

「恐れながら、長ラフィンニ。ひょっとして、この『使者の輪』、かのアシャ・ラズーンに与えたものではございませんか？」

「何？ アシャに…」

考え込んで、水鏡（カーフィ）を見つめていたラフィンニが、やがてにやりと嗤った気配を白骨の面差しに漂わせた。

「読めた」

「何ごとでしょう、長」

「アシャが、あの様で死にかけても会いたがった娘は、何と言ったかな」

「……確か、ユーノ……ユーノ・セレディスと。セレドの第二皇女とのことですが」

セレドじゃと、南の方の片田舎じゃ、ラズーン統治の南端であろうか、そう言ったざわめきが『泉の狩人』（オーミノ）達の間に広がるのを軽く制し、ラフィンニは続ける。

「その第二皇女よ、この子どもは」

「え…しかし、これはまるで少年…」

「見るがよい、ウォーグ」

ラフィンニは思わず呟いたウォーグを促した。

「手足の華奢さ、うなじの細さ、胸元も微かに膨らんでおろう。紛れもなく少女の体じゃ。ふふふ…」
「ついつい零れてしまったと言いたげな笑い声を漏らす。
「ユーノとやら、アシャの身代わりに使者を務めに参ったらしい」
「何と」「身代わりと?」「愚かな」
『泉の狩人』(オーミノ)達が再びざわめく。
「身代わり……少女が……ほ、ほほ」
セールが軽く嘲笑を響かせた。
「何と大胆な」
「如何にも、アシャが惚れそうな娘じゃ」
「いやいや」
笑いさざめく狩人達を制して、ラフィンニは続けた。
「なかなかどうしてたいした腕じゃ、見るがよい、シャギオと互角にやり合っておるぞ」
八角形の中にラフィンニが見て取っているのは、雪山の中を対峙し、互いの隙を狙い合う一匹の獣と少女だ。
少女の緊迫した表情に比べ、シズミィの気配は余裕綽々、如何に残酷に相手を屠るか舌なめずりをしているのがはっきり見て取れる。
「しかし、これでは、そうはもちますまい」
セールが苦笑まじりに首を振る。
「足下は雪、動きはすぐさま鈍くなり、感覚はなくなり、いずれは大地に倒れ果て、死して我らの贄となるばかり……」
一瞬考え込んだ様子で、セールはことばを切った。ちらりとラフィンニを伺った気配、やがて、
「……アシャに免じて、シャギオを引かせましょう」「そうじゃな」
何もこんな幼い無知な者の血で、雪山を彩ることもあるまいよ。
ウォーグも頷く。
「待つがよい」
合図をしかけたウォーグとセールを、ラフィンニはあっさり止めた。くっくっく、と不気味な獣じみた笑いを喉の奥で響かせながら、
「まだもうしばらく楽しんでよかろう」
くすくす、くすくす、と奇妙に可愛らしげな笑い声が周囲から漏れた。
「手が落ちれば引き上げますか」「足が裂かれて動けなくなれば?」「いやいや、心の臓が破れてからの方が楽しめるというもの」
そこには誰もユーノの命を案じる顔はない。
「……シャギオに長引かせよと命じましょうか」
セールは薄笑いを響かせて尋ねる。
「無知ゆえとは言え、聖なる山を蹂躪したのだから、覚悟はしているはず。己が何をしようとしたのか、心底身に沁みるまで、弄ばせましょうか」
アシャが嘆きましよう、それもまた一興、とはどこかから漏れた嘲笑、それにもラフィンニは不快を示すことはなかった。
「いや、如何に戦うのかも見てみたい」
ラフィンニはじっと八角形の水面を見下ろす。
「ユーノが倒れそうになったら、シャギオに導かせて連れてくるがよい」
「こちらへでしょうか」
訝しげなセールに、ラフィンニは顔を上げた。どの顔も同じ白骨の造り、それでもラフィンニの突き出した頬骨には一層白々とした光が跳ねる。いっそ穏やかともとれる口調で、
「いや、『沈黙の扉』の中へ。アシャの代わりに来たのなら、それ相応の覚悟は見せてもらわぬとな」
「まあ……」
一同の中に微かな驚きが走った。
「そこまで保ちましょうか」「それはアシャが?」「ユーノが?」
口々に呟く声は嘲りと期待がある。
「なるほど、確かにそれは楽しみ……ほ、ほほほほほほ」
堪え切れぬように笑い出すセールに、ラフィンニも笑みを返す。
「であろう? 我らは飽いておるのじゃ、この重苦しい平穩に」
「如何にも」「まさしく」「ふふふふっ」「くくっ」
ラフィンニのことばに、狩人達は一斉に禍々しい笑い声をたてた。

「は…あっ…」

喉が焼けついてくる。肺は熱く炎を発生し、心臓は今にも破裂してくれようと抗議の声を上げている。それに反して、冷えきった四肢は思うように動いてくれず、雪は柔らかい褥を思わせ、何度となくユーノを誘っている。

(もう少し……もう少しだ)

繰り返し疲れたことばを胸の中で呟く。

「っ!!」

ふわりと体重がないもののように舞い上がったシズミィが、空中で身を捻り、尖った金の爪と真っ白な牙を剥き出して、再びユーノに襲いかかった。握った柄を右に振り、倒した刃を相手に向け、顔の前で攻撃を防ごうとしたユーノ、だが、それを待ち構えてでもいたように、その剣の刃にすとっ、とシズミィが飛び降りてくる。

「くっ」

思いも寄らぬ攻撃に動けなくなった。シズミィが乗っているというのに、剣は軽い。だが、そのまま引き抜けるかと言えば、動かせない。目に見えない網に剣もろとも包まれたようだ。右手で剣を掲げ、そこに乗ったシズミィと相対したまま、ユーノは顔を強張らせる。と、まるでそれを計算していたのだと言いたげに、にやり、とシズミィは口を歪めた。改めて剥き出された牙、煌めく瞳は魔の影を宿して金と青、残虐な喜びを溢れさせてこちらを凝視してくる。

(どうする)

はあはあと整い切らない呼吸をもどかしく繰り返しながら、ユーノはシズミィの眼を見つめていた。

(どうする)

胸の中央で打ち鳴らされる鼓動が、吊いを知らせる鐘のように聞こえる。背骨の付け根が死の予感に竦んでいる。

(どうする)

強張った頬に、つうっ、と額から汗が流れ落ちる。顎へと滑り落ち、ぼとりと雪に落ちる、その柔らかな音までが耳に届く静けさの中、体だけが忙しく慌ただしい命の刻みを続けている。

(コワイ)

胸の底で怯え続けるもう一人の自分を感じた。自分で自分の胸を抱いて、震えながら訴えてくる。

(コワイヨ)

逃げ場はない。対応を間違えれば死ぬしかない。今自分が掲げる剣の先に、死は猛る獣の姿をとって消えることなく居座っている。

(眼を、逸らすな)

もう一つの声が囁いた。

ごくり、と唾を呑み込む。振動で剣が震えそうで力を込める。イズミィの体重は依然露ほどにも感じない、だが、まっすぐに掲げている腕に、剣そのものの重みが次第に次第に増してくる。

(眼を逸らすんじゃない)

呼吸を整える。瞬きをゆっくりする、けれど、視線を外さない。対峙するシズミィの目の中に、どれほど残酷な未来が待ち構えていようと、どれほど深い闇が潜んでいようと。

(逸らせば最後、こいつは私を襲ってくる)

ユーノの思考を読んだかのように、シズミィは僅かに耳を倒し、ゆっくりと尻尾を持ち上げた。銀青色の毛に包まれた、鞭のように柔軟なその長い尾が、じわじわとユーノの首に近づいてくる。まだ触れてはいない、だが、気配に皮膚が粟立つのがわかった。

(!)

突然、ユーノの頭に一つの考えが閃いた。成功するかどうかわからないが、やってみる価値はある。

「……」

無言でシズミィの尾が、首を絞めに来るのを待ち受ける。右肩が鈍痛を訴え、手が小刻みに震え出す。限界に迫る瞬間を、なおも見据えて引き延ばす。

命がぎりぎりと言をたてて引き延ばされていくのを感じた。ぷつり、とどこか、脆い部分の命の糸が一本、音をたてて切れたのがわかる。

ぷつり。ぷつり。ぷつりぷつり、ぷつ、ぷつ、ぷつぷつ……。

その音は、見る見るユーノの心の中で増え、重なり合っていく。過剰な緊張の負荷に耐えかねて、巨大な荷物を支えている縄が、きりきりと鳴りながら次第に解け、切れていくように。

(まだだ)

片目を閉じた。口を嚙む。慌ただしく繰り返していた呼吸を呑み込む。今この瞬間、シズミィに意識を集中させているのが精一杯だ。

(マダ…ダ)

既に頭の中は空洞と化し、一層深い心の層には空白の夢魔が喰い込んでいく。シズミィの尾はひどく緩慢に、冷えきった空気の中をのたうつ一匹の蛇のように、空間を泳ぎ渡ってユーノの首に達そうとしている。見えはないが、和毛が触れるのを感じる。心は恐怖と意志で充満し、だが、その意志もあつという間に活力と意味を失って、ユーノの全てが麻痺し、静止していく。

死の瞬間。

(イ、マ)

囁きは、夢魔に追われて心の奥底へ逃げ込んでいた、怯えた自分から漏れた。たちまち、細胞と心の層を深い下層から沸き立たせて、体中に響き渡る叫びとなる。

(今だ!!)

「っっ!!」「ギャッ!!」

一瞬に全てが起こった。

左手を伸ばす、シズミィの尾を掴む、そのまま全力で左腕を伸ばすとともに右手の剣を跳ね起こす。がつっ、と重い手応えが在り、同時にシズミィの銀青色の体に朱色の飛沫が飛ぶ。ユーノの左手に引っ張られ、右手の剣に裂かれながら振り回され、雪の上に鮮血を散らしたシズミィが声を上げる。左手からするりと尾が抜け落ち、

だがしかし、さすがにシズミィは一太刀程度の手傷では怯まない、すぐさま解放された尾を振り、身を捻って雪上に降り立つのももどかしく、跳ね返るように雪煙を上げてユーノに飛びかかってくる。

その攻撃に、疲労し切ったユーノに対抗する術があるはずもなかった。無防備に左右へ開いた腕、庇うことなく晒された胸に飛びつかれ、顔を歪める。

「ぐ！」

イズミィの爪が衣を裂き、肉の上から肋骨を掴んだ。激痛に跳ねる間もなく、がきりと喉首に牙が食い込む。ごぶっ、と鈍い音がすると同時に、飛びかかったイズミィがユーノが吹き出した血で紅に染まる。

(あ…)

痛みは急速に消えつつあった。のしかかられて背後に倒れる、雪の中に深く埋まる、その衝撃も冷たさも感じなかった。首から溢れる温かな血に唸り声をたてながらむしゃぶりついてくるイズミィの動きにも、不安も恐怖もなく、ただその体が寄り添ってくるのが妙に暖かく感じるだけだ。

手は動かない、足も動かない、シズミィが時折苛立たしそうに頭を押しつけ、なお深く牙を埋めてくるのに顔を仰げ反らせる、そのユーノの視界には、薄い雲が漂う静かな空が広がっていくのが映るだけだ。

(……何だろう)

それに気づいたのはシズミィの方が早かったのだろう、ふいに動きを止めて顔を上げる朱に濡れた口許、訝るように再び降ろしてくる顔は、首ではなく、ユーノの額を軽く嗅いだ。

(……鳴ってる…)

視界の色が落ちてきた。見る見る灰色の靄となり、白黒の濃淡も薄れ、ぽたりと落ちる雫に染まって薄赤く滲み、それもすぐに暗闇になり。

リィィ……リィィン。

額で微かな振動が続く。

(『聖なる輪』(リーゾン)…?)

「…は…」

ユーノが吐いた息は戻ってこなかった。

2. 沈黙の扉

ユーノがセシ公の館を発ってから三日目。
「では、どうしても行かれますか」
「ああ」
館の入り口には馬の手綱を握りしめて立つアシャ、それを見送るセシ公とレアナ、イルファの姿があった。陽射しは金、アシャの髪に細かな粉のように煌めきまわりついてくる。
「レアナ姫をよろしく頼む」
「わかりました」
「おう、まかせとけ」
柔らかに頷くセシ公、イルファがどん、と勢いよく胸を叩く。
「俺が必ずミダス公の屋敷まで連れていく」
「気をつけて下さいね、アシャ」
レアナがひたむきな瞳でアシャを見つめる。軽く組んだ白く長い指に祈りを込めるよう力を込める。
「どうか無事に帰ってきて下さいね」
頷いて馬上にひらりと飛び上がる。左胸の傷が鈍痛を訴えたが、それより気になるのは、『狩人の山』（オムニド）へ出かけたまま、未だに連絡のないユーノのことだった。
（『泉の狩人』（オーミノ）が気づかないはずがない。気づいてシズミィを差し向けないはずがない。使者と知って用件を聞き、『狩人の山』（オムニド）を下らせるのに、こんなに時間がかかるわけがない）
ミダス公の屋敷、『氷の双宮』、どちらにせよ、帰り着き次第サマルカンドが知らせにくるはずだったが、澄み渡り、少し冷え込んだ朝の大気の中に、白い羽ばたきはちらとも見えなかった。
（遅い、遅すぎる）
心臓の真裏に冷えた感覚、何かの手を打ち損ねたのではないかという恐怖がある。
「アシャ…」
つい、とセシ公が進み出てきたのに、身を屈めた。さらりと髪を払った相手が、傍目には口づけでも贈るのではないかという艶かしさで薄く微笑み、低く声を潜めて囁いてくる。
「例の件、手を回して調べさせます。リヒアルティも、あれでなかなか忍びの術は心得ていますから」
「頼む」
アシャも静かに頷く。
「事と次第によってはラズーンの存亡がかかる」
「アシャ・ラズーン」
離れながら、セシ公は笑みを含んで応じる。
「やはりあなたには、視察官（オベ）より、そっちの称号（クラノ）の方がお似合いですよ」
苦笑してアシャは身を起こした。
「では頼む！」
「はい」「おう！」
「気をつけて、アシャ」
レアナの可憐な声を背中に、アシャは馬の速度を上げた。

時は少し遡る。
リ…イ…イ…イン……リィ……イィ……イン……。
「？」
ミダスの花苑で花を摘んで来たリディノは、鈴のように澄んだ音が微かに響いているのに回廊で立ち止まり、一つの部屋を覗き込んだ。
「レス？」
「リディ」
敷物の上に腰を降ろして膝を抱え、小さな棚に載っていたものを見つめていたらしいレスファートが、びっくりとしたように銀髪を揺らせて振り返る。その瞳に不安そうな色がたたえられているのに気づいて、リディノは向きを変えて部屋に入った。片手に抱えていた花々の香気が、たちまち部屋中に芳香を満たす。
「どうしたの？」
「うん……また鳴っているんだ、これ」
レスファートが指し示したのは、ユーノが外しておいていったもの、透き通って光を反射させている『聖なる輪』（リーソン）だ。少年は落ち着かなげに、棚の『聖なる輪』（リーソン）とリディノを見比べた。
「また？」
「四、五日前から、こんな風にね、ときどき鳴るの」
アクアマリンの瞳をじっと『聖なる輪』（リーソン）に据える。
「それが、何だか、だんだん弱くなっていくみたいなの」
「ほんとう……弱々しい音ね」
膝を折り、薄紅の衣の裾を広げ、リディノも腰を降ろした。
「でも、『聖なる輪』（リーソン）が鳴るなんて、聞いたことがないわ……あ、ジノ」
「はい？」
リディノがレスファートと話し込んでいるのをみやり、自分の用はないものと思っただけのジノが通り過ぎていこうとするのを、リディノは呼び止めた。いつもと同様、薄緑色の長衣の腰に深草色の帯、長い黒髪には深草色の布を巻きつけている。少年じみたしなやかな動きで、リディノの側で片膝を突き、頭を下げた。
「御用でしょうか、姫さま」
「おまえ、『聖なる輪』（リーソン）が鳴るなんて、聞いたことがある？」

「『聖なる輪』（リーソン）が？ ……いえ…」
ジノは顔を上げてきょとんと眼を見張り、緩やかに首を振った。深い青の瞳を瞬く、静かな物腰はリディノよりも大人びたものがある。

「『聖なる輪』（リーソン）はあまり詩にも謳われておりませんし……あ」
ふとジノは眉を寄せ、何か思い出したようにことばを切った。その先を続けようとしたとたん、屋敷の入り口あたりでざわめきが起こる。

「……のか？」
「アシャだ！」
響いた声にレスファートがぴょんと跳ね上がった。

「アシャ兄さま？」
すぐさま駆け出すレスファートの後を追って、リディノが部屋を出た時には、既にレスファートは回廊を曲がってきたアシャに飛びついてた。

「アシャ！」 「つつ」
飛びつかれたアシャが顔を歪めて一瞬体を捻る。その肩に乗っていたサマルカンドと一緒にグギャ、と奇妙な声を上げて体を揺らせ、慌てて体勢を整える。

「どうしたの？」
「…いや、何でもない」
戸惑う少年に、アシャがすぐに笑みを返した。

「元氣そうだな、レス」
「うん！ ユーノ、どこ？ 一緒だったんでしょ？」
アシャの背後から今にもやってくるかと後ろを覗き込むレスファートに、アシャが険しい顔になる。

「やっぱりまだ帰ってないのか」
「クェアッ！」
眉を寄せたアシャ、鋭い警告のような叫びを上げたサマルカンド、その二人を見上げ、レスファートがようやく異常事態に気づいた。

「……帰ってないって……ユーノと一緒にじゃなかったの？」
ゆっくりと固く握りしめられるレスファートの拳を見て、アシャは奇妙な表情になった。まるでののしられるのを覚悟している小さな子どものような顔。

その後ろから、ゆったりとしたいつもの歩調で、ミダス公がやってくる。

「……いろいろと、事が起って、な」
「だからぼくを置いていったんだ？」
珍しく言い訳がましいアシャの口調を感じ取ったのだろう、レスファートが早速心で腐れた。さすがに苦笑を返し、まあ、レス、とアシャが声を変える。

「話すから、最後まで聞いてくれ」
アシャがこんな前置きをすることなど滅多にない。リディノは緊張してアシャを見つめ返す。だが、その後語られた物語は、彼女の想像を遥かに越えていた。

魔物（パルク）との戦い、セシ公の協力、ダイン要城の崩壊と陥落、レアナ姫の奪回、『泉の狩人』（オーミノ）への使者、怪我をしたアシャの身代わりにユーノが『狩人の山』（オムニド）へ出かけたこと。最後近くの話の間に、レスファートの顔色は瞳と同じぐらい青ざめていた。

「そ…んな…ユーノ…」
呆然と呟くレスファートの声を耳に、我に返ったリディノははっとした。

「ちょっと待って、アシャ！」
ごくり、と唾を呑み込む。背後の部屋に置かれた『聖なる輪』（リーソン）を痛いほど意識する。

「アシャなら知ってる？」
「何をだ？」
「……『聖なる輪』（リーソン）が鳴ってるの、ユーノが残していった」
「っ！」 「！」
ぎくりとアシャとミダス公が同時に体を強張らせた。

「四、五日前からだって。そうよね、レス？」
「う、うん」
レスファートは状況が呑み込めないようだ、訝しくリディノに頷き返す。

「それでね、アシャ、その音がどんどん弱くなっているみたいなの、あれは一体……アシャ？」
強張るを既に通り越して殺気立った顔になっていくアシャに、リディノは思わずことばを切る。

「それは、どこにある」
詰問口調に、レスファートが怯えたように振り返った。視線の先の部屋を見て取り、アシャがリディノの側を厳しい顔で通り過ぎる、まるでそこに彼女などいないかのように。手に抱えていた花が一輪、勢いに花卉を散らすのに、リディノは慌てて振り返り、部屋に入る。

「リ……リ……リ……リ……イ……イ……イ……イ……イン…」
微かに鳴り続けている『聖なる輪』（リーソン）が、まるで魔物（パルク）が封じ込められている小箱でもあるかのように、アシャはしばらくそこで立ち竦んでいた。やがて、異様に丁寧な草草で取り上げる。こちらに向けた背中、俯いた首筋に、目には見えないチリチリした光が立ちのぼり広がっていくようだ。

「アシャ…？」
『聖なる輪』（リーソン）を取り上げていない手が腱が浮き出るほど強く激しく握りしめられた。背中に宿った鋭い気配がそのまま拳に注ぎ込まれ、何かを壊しそうに見えて、リディノはもう一度声をかける。

「アシャ？ …どうしたの、ねえ」
「……ユーノが危ない」
思わず背後のレスファートを振り向きそうになった。少年がいるこの場所で、これほど不用心なことばを発する男ではなかったはずだ。

だが、混乱するリディノを振り返るアシャの顔に、なおぎよっとした。

暗く翳った紫紺の目。真っ白な顔。さっきまでの微笑は影もなく、表情も根こそぎ削ぎ落とされたかのよう、白く干涸びた口が動かなければ、骸骨にさえ見えかねない。

「ア…シャ…」

「『聖なる輪』（リーゾン）は持ち主の『死』とともに鳴り始める」

淡々とした感情のない声が応じた。

「鳴っている間は、心に共鳴を起こさせ、精神を死なせるのを防いでくれる……………体が保っていれば、の話だが」

「ふ…」

意味を悟ったリディノと同じく、背後でレスファートが息を呑む気配がした。アシャが体を振り返らせる、気のせいだろうか、アシャの体に黒々とした巨大な穴が開いているように感じるのは。その足下が今にも細い草木のようにくしゃくしゃと崩れそうに見えるのは。

これほど弱々しく空ろに見えたアシャを、リディノは知らない。

「鳴り終えたとき……………持ち主の全ては失われる…っ」

最後のことばを言い切った瞬間、すうっ、とアシャの顔に血の気が戻った。いや、血の気ではない、そんな生易しいものではなくて、煮えたぎる憤怒の色だ。ぎゅっと『聖なる輪』（リーゾン）を掴んだまま、大きく足を踏み出して、まっすぐリディノの方へやってくる。

「あ…」

迫り来る凶悪な気配にリディノは思わず身を引いた。腕から零れた花が散る、それをぎしりと踏みつぶして、アシャは目の前を急ぎ足に立ち去っていく。

「アシャ！ 待ってよ、アシャ！」

レスファートが高い声で叫んで、身を翻すのを見やり、リディノはのろのろと視線を落とした。

「アシャ……………兄…さ…？」

踏みにじられた花、小刻みに震える体、まるで何かに頬を強く殴られでもしたように、リディノは花を手放し、滲む涙に顔を覆った。

リ……イイ……ン……リ…イ……ン。

静まり返った氷の岩屋の中、微かな響きが訝する。

「ふ…」

深く澄み渡る輝きをたたえた床の上に、ユーノは横たわっている。外光は射していないが、壁に使われている光石のせいで仄かに明るい広間、ぐったりと四肢を投げ出している左肩は、見るも無惨なささくれ立ったような血肉の塊と化している。首の付け根辺りから引き裂かれたような傷がぱくりと口を開け、傷がじっとりと濡れているのは、そこからまだじわじわと流れ続けている体液のせいだろう。

もっとも、傷からすれば、その量は信じられないほど少なかった。まるで見えない何かが膜となって傷を覆っているように、吹き零れて一気になくなるはずの血潮は、ごく僅かずつ滲み出して零れていくだけだ。

「う、…」

今しも、その微かに開いた唇から小さな呻きと息が漏れ、ユーノの命の灯が揺らめきながらも消えてしまっ

てはいないことを教える、が。

ジリッ……ガッ……ガラッ！ ドスッ！

突然、その小さな吐息に呼応するように、固いものがこすれあう響きとともに、広間の天井から崩れ落ちた何かが凄まじい勢いで床にめり込んだ。薄闇にきらきらと光を放ちながら突き立つそれは、一抱えほどもある透

き通った結晶の柱だ。

もし、ユーノに意識があるならば、その岩屋の天井を見上げた途端、声もなく立ち竦んだことだろう。

床を平に覆う広々とした天井は、実は大小無数の水晶の原石から成っていた。原石、と言っても、泥や土に塗られているわけではない。優れた芸術家が腕によりをかけて磨き上げたような滑らかな表面、六角の柱状で鋭く尖

った先端を下に、ぎっしりと貼りついている。岩屋の天井に水晶が貼りつけられたというより、水晶の山を掻き分けて岩屋としたようなその造形は、人間業ではなし得ない精巧さと美しさがあったが、同時に実は、残忍さと気まぐれを含んでいるものだった。

「く…っ」

既に意識朦朧としており、声を上げたつもりさえないユーノが、僅かに身動きし唸る。それはもう、声と呼べないほど微かな悲鳴だったが、天井から吊り下がった剣の切っ先にも似た水晶の塊は、確実に反応した。

ズッ…。

ユーノの真上近くの、水色の結晶が微かに震え、揺れる。はめ込まれていた場所からついに重さに耐えかねたとでも言いたげに、じりじりとずり落ち始め、やがて生を保たない無機物特有の容赦なさで、まっすぐ真下のユーノめがけて落ちていく。

ふ、と何に呼ばれたのだろう、ユーノが目を開けた。漆黒の瞳には膜がかかったような無表情さが満ち、自分めがけて落ちてくる水晶の切っ先にも注意を払う様子はない。

ヒュ……ウン……ドッ!!

「……」

水色の水晶は、ユーノの右頬すれすれを掠めて耳のすぐ側に落ちた。天井にあっては小粒の結晶だったが、それでも落ちてみれば、優に顔ほどはある。直撃すれば、ユーノの手足なぞ、ただの肉塊に成り果てるだろう。

だが、ユーノには、その光景も、その光景が与える恐怖も意味を為さなかった。見えなかったわけではない。それよりも、心をぎりぎり締め付けてくる責め苦しに耐え続けるのに精一杯だったのだ。

(…『聖なる輪』(リーソン)が……鳴って……いる…)

いつ気づいたのか定かではなかった。ただ、それが鳴ると、心が泡立ちかき回されて、幼い頃の思い出が次々と甦ってくる。そして、それを待ち構えてでもいたように、得体の知れない何かの気配が、ユーノの魂を粉々にしながら引きずり出そうとするのだ。

(鳴る…な…)

そう願う。

(鳴る…な…?…)

『聖なる輪』(リーソン)が鳴らなくなるということは、死を意味するのではなかったか。

(それでも……いいんだ…)

それでもいい?

どうのことだ?

問いかけてくるのは誰だろう。

(だって…)

その問いに、心の中に一つの光景が溢れ出す。

「はうっ！」

「ユーノ様！」

夜の闇。繰り出されてくるカザドの刺客の剣。傷を負って転がれば、手から剣がはね飛んでしまう。

(しまった！)

歯噛みしても既に遅い。この前の戦いで受けた傷が完治していないユーノにとって、剣がなければ苦戦は必至、このままでは屠られるのを待つしかない。

(これまでかっ)

「たああっ!!」

勢いに乗って振りかぶり振り下ろしてくるカザド兵、さすがに覚悟して目を閉じたとたん、響いたのは絶叫。

「うわああっ！」

(サルト?!)

ぎょっとして目を開けると、目の前にずしっとサルトの体が降ってくる。

「ユー……ノ…さ…ま…」

「サルッ…」

キンッ！

呼びかけながら、すがるようにしがみつかれて手渡された剣で、カザド兵の攻撃を受け止めた。剣さえ手に入れば、一人や二人のカザド兵、たとえ負傷したサルトを庇ってでも倒せないユーノではない。

「ひ、ひけっ！ ひけえっ!!」

悲鳴のような叫び、嵐のように去っていったカザド兵、ほっと息をついたユーノは次の瞬間体を強張らせる。背後に庇ったはずのサルトがぴくりとも動かない。そればかりか、その体を覆うのは半死半生の荒い呼吸でもうろたえたように轟く心臓の鼓動でもない、固く深く静まった死の無音だけ。覗き込めば、骨に達するほど深く大きく切り裂かれた背中の中、それだけではない、抉り込まれたような刺し傷が背中に抜けている。

「サル…」

(私を、庇って)

静寂の中、視界が一気に曇った。

誰もいない、誰も襲撃に気づいていない、今ここにいるのは、ユーノとサルトだけ。そして、今もなお、誰一人駆けつけてくる気配さえなく。

だから、ユーノは心のままに振舞える。

そろりそろりと、冷え強張っていくサルトの体に腕を回す。抱え、ゆっくりと抱き締める。

『本日より付き人になりました、サルト、とお呼び下さい』

付き人など初めてだった。着替えをきちんとしないことや食事をちゃんと摂らないことを、あれほど真剣に心配されたことも。

『いいですか、ユーノ様、仮にも第二皇女なんですから、時にはにっこり笑って下さい。……違いますって、それじゃ怒ってるみたいですよ』

傷を隠すために遠ざけると悲しげに顔をしかめ、頼みごとをすると喜んで駆けよってきてくれた。

『ありがとうございます！ 俺、お役に立ってるんですよ！』

老いた両親の世話をしなくてはならないと言いながらも、いつも嬉しそうだった。

『俺一人っ子だから。ユーノ様みたいなのが三人居ればよかった……あ、失礼しました！ 何もユーノ様が男勝りだなんて言ってませんから！』

からかう笑顔が、心配するしかめ顔が、頭の中を、心の底を、繰り返し繰り返し巡り巡り巡っていった。

「ご…めん……」

サルトの肩に顔を埋め、ユーノは呟いた。泣き声を上げる代わりに、何度も何度も謝り続ける。

「ごめん……ごめ…ん……私の……せいだ……ごめ…ん……サルト…っ」

サルトの死は隠された。

傷痕の残った遺体を返すわけにはいかない。彼は遣いに出たまま帰らなかったということになった。

どこかで盗賊に襲われたのかも知れない、彼を一人で遣いにやるのではなかったと話すユーノに、老父母は肩を落として帰っていった。老夫婦の世話を密かに言いつけるのはもちろん、その後ろ姿を見ながら、ユーノは心の中で詫び続けた。

(私のことを、憎んでも嫌ってもいいから。だけど、今は話せない、ごめん……ごめんなさい)

唇を噛んで見送り続ける、口の中に苦い血の味が広がる。

だが、涙は一切出なかった。

(だって…)
 ユーノは心の中で問いに応じる。
 (あの時だって、私に付いていなければ、サルトは死ななかった……ううん、アシャだって)
 魔物(パルク)の姿、禍々しいドーヤル老師、傷を負いながらもユーノを助けにきてくれたのに、ユーノの腕の中で気を失ったアシャ。
 サルトの姿が重なって凍りつくほどぞっとした。
 (もし、私がギヌアなんかに狙われてなければ)
 レスファート。カザド兵との戦いで、滑らかな足に走った紅の筋。
 (カザドなんかに狙われてなければ)
 護ろうとしていたレアナは、ユーノを引っ張り出すために連れ出されて困になり、危うく殺されてしまうところだった。いや、ユーノ一人だったなら、確実に殺されていただろう。
 (私がいたから……ううん……私が……いなければ)
 生まれ損なつたとは思っていた。神様とて忙しいのだろう、時には少女の体に少年の魂を入れてしまうことがあるのかも知れない。送り出してから、ああしまったと見送られていたのかも知れない。
 (ひょっとして…)
 ユーノは空ろな心の奥で考える。
 (生まれたこと自体、間違っていたのかも知れない)
 父母とレアナ、セアラが談笑する中に入れなかったのも、一度や二度ではない。拒まれたわけでもないのに立ち竦んで、一人でじっと四人で作られた輪を見つめていた。それでも時にはそこに入りたくて、手を伸ばしかけ、その都度、カザドが来るかも知れないと思い直して首を振り、背中を向けた。
 ミアナ妃が優しくレアナの髪をまとめる。セアラのリボンを結び直してやる。皇はおどけて小さな貴婦人達にわざわざ椅子を引いてやり、レアナとセアラが優雅にドレスを広げお辞儀を返して腰掛ける。響く笑い声、甘く柔らかい母の音が窺める、皇女はそんなに大声で笑うものではありませんよ。
 その声を、全身を耳にして、背中を向け、庭のほの暗い隅に油断なく視線を配りながら、テラスの手すりに腰掛け、聞いた。心の全てを見えない手にして、朗らかな輪に差し伸べながら考えていた。
 (不思議だな)
 温もりを求め、肩を竦めて少し寄せる、抱く腕はテラスに突いて体を支えているから。
 (あそこに私がいなくても、何のかわりもないんだな)
 たとえばレアナがいなければ、まずミアナ妃がレアナはどこにいるかと尋ねるだろう。同じようにセアラがいなければ、皇が、ミアナ妃がいなければ、同じく皇が、皇がいなければ、ミアナ妃が居場所を確かめようとするだろう。居場所を確かめ、何をしているのか、どうしてここへ来ないのかと尋ねるだろう。
 けれども、ユーノについては、始めにセアラが「ユーノ姉さまは？」と尋ね、皇が一言「またレノでも駆けさせておるのだろう」と応じたきり、以後は誰も話すことさえない。
 (私が……いなくともいい……のかな?)
 夜の闇に問いかけても、答えが返るはずもない。
 (父さま達のせいじゃない)
 そっと心の中で反論する。
 (私はあんまり皇宮にいないから、な)
 ちゃりっ、と腰で剣が音をたてる。
 (うん、だからきつと、そのせいだ)
 俯く。そうではない、と気づいているのを見まいとする。
 (護れれば……いいだろ?)
 自分に問いかける。
 (護れれば……ねえ?)
 帰る所はないとわかっていても。
 (でも……アシャの側には、もう、レアナ姉さまがいる…)
 そこに、ユーノが居るどんな意味があるのだろう。アシャはレアナを命にかえて護るだろう。レアナはアシャの心安らぐ場所となるだろう。アシャはいずれセレドに戻り、そして、セレドは安泰となる。父母はもちろん、いずれセアラにも護ってくれる人が現れる。
 (私の手なんか……いらない……私は誰にも必要じゃない……)
 そればかりか、ユーノが居ることで、アシャレアナ、レスファートやイルファを巻き込んでしまう可能性の方が遥かに大きくなりつつある。殺気立ったギヌアの顔、下卑た笑みを浮かべるカザディノの顔、敵の顔なら幾つも幾つも思いつく。
 (……ああ……そうだ)
 ゆっくり瞬いて思う。
 (皆を護るなんて言って、ほんとは)
 ユーノが支えられてきたのだろう。皆を護り支えていると思っていた、そのようにあろうと願っていた。
 けれど、本当は、ユーノが、ユーノ自身が、自分は生まれて来ない方が良かったと思うのがたまらなかったからだ。何かどこかで、自分が必要とされていると信じていたかった。
 (だから……『聖なる輪』(リーソン)…)
 心の中でそっと命じる。
 (もう……鳴るな…)

「……お許しを」

念を込めていたセールが、低く呟いて胸の前で交差させていた腕を解いた。水鏡(カーフィ)を見つめている

ラフィンニに深く頭を下げる。

「私は、これ以上、この少女を追い詰められませぬ」

死の国の風を思わせる声が、まるで涙をこらえているように滲んでいる。

「狩人の名を剥ぎ取り、ミネルバと同じく、ラズーン支配下（ロダ）へ放逐して下さいませ。私は、この少女の『沈黙』に負けました」

項垂れて膝を突く。

「長ラフィンニ…」

デーディエトも交差させていた腕を離した。空ろな眼窩の奥に淡い光を煌めかせて許しを請う。

「私もラズーン支配下（ロダ）にお放ち下さい。『泉の狩人』（オーミノ）に価しないものでございます」

「……して、どうする」

ようよう、ラフィンニが深く重い声で応じた。

「そなた達もミネルバのことは聞いて知っていよう。あやつは、『泉の狩人』（オーミノ）としての沈黙の掟を破り、気ままに世の『運命（リマイン）』を狩っておる。我らは、この世にあってはあくまで異種族、この『狩人の山』（オムニド）でこそ、かろうじて己の魔を封じ、沈黙を持って生き抜ける。『狩人の山』（オムニド）を降りれば、我らに残された道は、人の世の闇を跳ぶ魔物として、おぞましい一生を終えるしかない」

ラフィンニの口調には、今まで聞かれたことのない、深い哀しみがあつた。

「『運命（リマイン）』に降りようとラズーン側につこうと、我らの力は所詮闇のもの、この世ならぬ力じゃ。放たれば魔となり、止める術を知らぬ。それは、この世の始まり、『氷の双宮』が星の住みかとなりし時からの我らが定め……。我らがつけば、その者達は勝利を得よう。したが、勝利を得た者が聖なる者とは限るまい。我らの力は、邪悪をも正義にしてしまい……。我らの存続を許し得た星の祈りに背くことになる。それゆえに、我らは『狩人の山』（オムニド）の奥深くにて息を殺し身を潜め、時折迷い来る旅人を屠るのみで満足し、沈黙を守り続けたのではなかったのか」

ラフィンニは水鏡（カーフィ）を覗き込んだ。

「けれども、長よ」

セールが慌ただしく抗議した。

「この少女の『沈黙』をご覧下さい。私は、この少女の『沈黙』にこそ従いましょう。この少女が命ずるままに、この手足を動かしましょう。そうしても、まだ私達は魔でしかありえないものでございますか？」

「魔でしかありえない」

ラフィンニは冷ややかに切り捨てた。

「どう理由をつけようと、我らは魔の者、人の生き血を啜り、死を喜び、夜の訪れを待ち望む者じゃ。……それに、この少女、もはや保つまい。シャギオが手加減はしたものの、あの一瞬、あの娘の心に死の予感を送り、動きを止めさせたのは、語ることもなくとも知っておるぞ、ウォーグ」

セール、デーディエトとほとんど同時に交差の腕を解いていたウォーグが項垂れた。

「のう？ 愛する者を失う哀しみに、奪おうとする者を憎むのはよくあること、しかし、それに死を伴わせるのは、やはり、魔の力じゃ」

水盤の周囲に集まっていた十人の『泉の狩人』（オーミノ）のうち、五人までが念を送るのを止めて、ラフィンニを見上げている。

「『死の女神（イラクトル）』はあの少女を抱きかかえて嗤い続けておろうよ、我ら『泉の狩人』（オーミノ）の甘さをな」

ラフィンニは、しばらく無言で水鏡（カーフィ）を見つめていた。

氷の岩屋、横たわる少女、その周囲には天井から抜け落ちて突き立った水晶の六角柱。

「……何と言う誇りであろうな」

やがて、低い呟きがラフィンニの口を突いた。

また二人、念を込めるのを諦める。

「我らがこれほど禍々しい死の傷みを送り続けていると言うのに、あの娘、ただの一度でも救いを求めたか？」

「……」

「愛する者がいぬわけではなさそうじゃ。しかし、死に瀕しても、その名を呼ばぬ。……もっとも、呼んだが最後、声の響きに揺さぶられて、天井の水晶が、その想いもろとも体を打ち砕くが」

くっくっく、とラフィンニは堪え切れぬ楽しいものを想像したように笑った。が、すぐに生真面目な気配になつて、

「じゃが、それに気づいてはおらんだろう。ただ、自分を救いに来る者を巻き込むまい、それだけのことで誰も求めぬ。どういうわけかは知らぬが、愛する者の名さえも心の奥底に沈めてしまい、『死の女神（イラクトル）』にしか見せぬつもりらしい……。魂の絶望にさえ無言で耐え抜き、ただ死を待っている……」

また二人、『泉の狩人』（オーミノ）が交差させた手を解く。間もなく、最後の一人が念を解いた。

「して、我らは皆、あの娘に負けたというのか」

「はい」

最後まで手を解かなかったカイルーンが悔しそうに応じた。

「あの少女に、死の恐怖と、そこへ自分を追いやった人々への憎しみを送っておりましたが、あの娘の望みはただ一つ、自分の死によって、家族や親しい人々を守ることしかございませぬ。そのための死に、悔い一つもございませぬ。つまりは…」

「決して、魔には屈せぬと言うのだな？ 自己憐憫という、この上なく優しい魔にも身を任せぬ、と」

ラフィンニは微かに微笑んだようだった。

「……まさか、あのような小娘が『大なる沈黙』を達するとは……のう」

「え？」 「それでは長！」

はっとしたように、セール、ウォーグが声を上げる。

「うむ、我らは…」

「長、ラフィンニ！」

ラフィンニが頷き、何事か語ろうとしたその時、慌ただしく一人の『泉の狩人』（オーミノ）が、青衣の裾を蹴立てて部屋に駆け込んできた。

「何事じゃ、騒々しい」

セールが咎める。

「も、申し訳ありませぬ、しかし」

飛び込んできた狩人は、詫びはしたものの神経質に戸口の方を振り返りながら応じる。

「しかし、何じゃ」

ただ事ではないと察したラフィンニが進み出る。

「そこに、あ…」

「あ？」「失礼する、長、ラフィンニ」

その先はもう聞くまでもなかった。

うろたえた狩人の背後からふらりと現れたのは、乱れた金髪に瞳を暗く輝かせる、猛々しいアシャの姿だった

。

「ずいぶん殺気立っているな」

「殺気立ちもしよう」

そこは、水盤のある部屋とは別の小部屋だった。

床の上に白い毛皮と黒い厚布を敷き詰め、周囲の壁は蒼い貴石、ところどころにかなり古い壁掛けを飾り、窓のない部屋の中を照らすべく、四方の隅と天井の中央から金属の灯皿が銅色の鎖に吊られている。

その揺らめく灯の下で、アシャとラフィンニは穏やかに向き合っていた。

伸びやかで美しい肢体を寛いで伸ばしているラフィンニが、細かい彫りが施された水晶のグラスにたたえられた酒を含む。

「しかし、奇妙な男じゃな」

訝しげなアシャの視線に笑み返し、

「そなたは周囲が殺気立てば殺気立つほど、寛いでくるように見える」

「そうか？」

アシャの方もゆったりと体を伸ばして肘掛けにもたれかかっている。とても敵陣に一人居る男の振舞いではないだろうが、相手は『泉の狩人』（オーミノ）、こちらが焦り苛立てば、余計に面白がるだけだろうとわかっている。

「剣も持たずに戦士が何をしに参った」

「確かに短剣は持っていない」

所持品改めなどせずともお見通しか、と苦笑する。

「和平を申し込んだ相手と事を構える気はないからな」

「なるほど」

ラフィンニは鷹揚に頷いた。白骨の眼窩の奥にちらちらと楽しげな色が浮かんだようだ。

「そなたは今、視察官（オペ）でもなければ、ラズーンの世継ぎでもない、ただのアシャというわけか。して、その『ただの男』が何をしに参った？」

「……『ただの男』にふさわしいことを」

アシャは笑みをたたえたまま、ぽつりと言いつ切る。

「ユーノを返してもらおう」

ぴく、と、ラフィンニの手が止まった。傾けるグラス越しにアシャに視線を動かした気配があった。

じじっ、と灯皿の芯が音をたてる。

それ以外は、何の音もしない。

この気配は『氷の双宮』の気配と似ているな、とアシャは思った。どちらも、その根本のところは、人の思惑に頓着せず、人の願いを感知しない。存在し続けることが全ての意味であり意義であり、その前にあっては『人』は余りにも脆く、か弱い。

「……ほう」

通常の者には堪え難いぴりぴりとした沈黙の後、ラフィンニが静かに吐息した。迷う様子もなく、冷淡にことばを紡ぐ。

「断る、と言ったら」

「腕づくでも」

隣家で子どもが喧嘩しているのを止めてよ、そう言われたような気軽さでアシャは応じた。所詮人外の理、どれほどことばを尽くし願い奉ろうとも、叶わぬものは叶わないと知っている。ならば、何が何でも押し通る、その意志の強さを示すより他に道はない。

平然と与えられたグラスを掲げ、中の酒を含んだ。鮮血がかくやと思わせるような深い紅、とろみのある甘さに強い芳香、紛れもなく最高の美酒だろうが、毒を入れられていない保証はない。濡れた唇が薄紅に染まっているのを意識したまま、にっこりとラフィンニに笑ってみせた。

「ここがどこか、心得ておろうな」

「聖なる『狩人の山』（オムニド）、『泉の狩人』（オーミノ）の神殿」

「私が誰だか、忘れてはいまいな」

「狩人の長、ラフィンニ」

「その務めは」

「死を司る者」

ラフィンニは楽しげに、なお楽しげにことばを重ねる。

「それを確かめて、なお死に急ぐか」

「死に急ぎはするかも知れない、が」

アシャは目を細め、笑みを深めた。

「あいつだけは連れて帰る」

「……『太皇（スーグ）』の助けがあったとは言え、『氷の双宮』からここまで宙道（シノイ）を開くなぞという無茶をする男じゃ、本気だとは思うが」

「それほど無茶ではなかった」

くすり、と笑う。

「この前の宙道（シノイ）を繋げれば、後はここへ焦点を伸ばすのみ」

「安う言うてくれる」

ラフィンニは少し視線を逸らせた。

「宙道（シノイ）は空間の虫食い穴じゃ、四方八方に開ければ『場』が崩壊することぐらい知っていよう。『狩人の山』（オムニド）と『氷の双宮』は双方特別な『場』、易々と繋げば、空間そのものが保たぬぞ」

しかも、この位置を外部から特定するのは至難の技のはず。

「……視察官（オペ）には、一度来たところなぞ、道案内もいらぬというわけじゃな」

小さな吐息一つ、やがてくつつつと嗤って、柔らかな膨らみを包む青衣を整えて起き上がり、ラフィンニは酷薄な口調で断言した。

「あの娘は帰らぬ」

「…」
じろり、とアシャは冷たく相手を見上げた。針の切っ先のような視線を受け止め見下ろし、
「我らのシズミィを傷つけ、勝手に使者を入れ代わる所行は許し難い。償いとして『沈黙の扉』に封じてある」
「…」

アシャは舌打ちしかけたのをかろうじて堪える。噛み締めた奥歯が嫌な音をたてる。
「知っての通り、あの扉を開けるには沈黙の誓いが一つ、必要だ。我らをその沈黙で納得させねば、狩人十人で封じた扉は開きはせぬ」

ラフィンニは淡々とした声で続けた。
「それに、あの娘は『死の女神』（イラークトル）に好まれておるようだ。シャギオに左肩を喰い裂かれ、心も死を求めておる。今、あの娘が生き永らえておるのは、『聖なる輪』（リーソン）の囁きあるがゆえ」

「だから、こそ」
食いしばった歯の間から、アシャは無理矢理ことばを絞り出した。
「俺が、迎えに、来た。あいつを死なせるわけにはいかん。断じて許さん」
「あの娘は傷つき、疲れ切っておる。休息を与えようとは思わぬのか？」
からかうような口調ではあったが、その底にラフィンニの本心が透けたような声音に、いつかの盲目の導師を思い出した。ユーノの心に触れた者が、皆一様に訴える『もういいではないか』という囁き、だがそれはいつも、アシャに聴こえない、アシャだけに聴こえない。それはアシャがユーノの心深くまで触れられていないからなのか、それとも、アシャの欲望がユーノへの想いよりも勝っているのか、それさえもわからない、だが。

「休息なら…」
（俺の腕でとればいい。俺の胸で眠ればいい。もし、それでお前が寛げるなら、俺は）
胸に弾けた激情はアシャからことばを奪い去る。
（俺は一生だって、お前を護り続けてやる）

「……くっ」
「……なるほど」
ふと、何か思いついたように、ラフィンニが続けた。
「わかった。ならば、アシャ」
ゆっくりとアシャに笑みかける気配は決して友好的なものではない、むしろ。
「それでは、扉を開ける代償に、そなたの、あの娘への沈黙をもらおう」

「っ」
思わず息を呑んで顔を上げた。そのアシャの反応に満足したのだろう、ラフィンニはこれまでより数段喜ばしげに声高く笑う。

「ほほほ……案ずるな、アシャ」
「ラ、フィンニ…」
掠れた声に懇願が混じったのを感じた。交渉の失敗を予感する。自分をののしる声が出ている、今どうしてそれほど頼りなげな声を出すのか、と。
「何も一言も話しかけるなど言っているのではない。だが、あの娘に、そなたの想いを決して悟らせるなど言っておるのだ」

「……なぜだ」
「…我ら『泉の狩人』（オーミノ）は、世の始めより、たった一人の王を待っておった」
ラフィンニが声を翳らせる。
「己の心の魔に負けぬ、『大いなる沈黙』を貫ける者を。『太皇（スーグ）』かと思もした。そなたかと思ったこともあった。だが、何かが合わなかった。そして、あの娘を『沈黙の扉』に封じて心を責めながら、我らはいつしか悟っていた、この娘だ、と」

ふ、とラフィンニはどこか陰気な笑いを浮かべた。
「我らは『女』なのでな、やはり『男』の沈黙には、納得できかねるのだ」
「それがどうして、俺の、ユーノへの想いに繋がる！」

叫ぶつもりはなかったのに、ことばは唇を衝いた。
アシャとて、気楽にユーノに想いを重ねてきたのではない。始めは同情、次には好意、だが繰り返し距離を縮め近づき抱くにつれ、ユーノの中に自分の運命が描かれているのに気づき始めた。一人で居るときには見えなかった己の本心、真実の願い、切実で、けれども何ものにも代え難い祈りが、ユーノに触れ、ユーノと接し、ユーノと関わる中で、まるで鮮やかな物語を紐解くように現れた。

そうだ、アシャは今初めて、『アシャ・ラズーン』という存在を生きようとしている。無視され続け、殺され続け、亡き者にされていた命が、今ようやく芽吹き、力を得て伸びつつある。

そして、それは全て、ユーノ・セレディスというただ一人の娘の手を取ることで始まった物語なのだ。

それを失う恐怖は、アシャの全身を戦かせる。
そのアシャの煩悶を、ラフィンニは悉く見破っているかのように、しばらく沈黙した。

やがて。
「我らが王と認めた以上、王を守るのは我らが務め」
「それがどうした」
「……あの娘には、愛している者がいるようじゃ」

「っっ！」
びく、とアシャは体を強張らせた。
「それがそなたかどうかは知らぬ。じゃが、もしそなたではなかった時、想いを告げられて苦しむのは、我らが王…」

「……………」
目を見開く。
がさり、とアシャの胸から巨大な影が剥がれ落ちた。
（俺は、また）
「またもや、自分のためだけに、ユーノを求めようとしていたのか？」
「……………」
反論が、できない。

「それを守るとなれば、封じた十人も納得しよう。我らが王を、しばしそなた達に委ねることも譲ろう。が、その沈黙さえ守れぬとなれば」

ラフィンニは長い髪をさらりと払った。

「既に王は満身創痍じゃ。傷む心は我らが力をもってしても、癒されぬほど深くささくれだっておる。今はまだ、王は自らの誇りゆえに死を選ぶことはない。しかし、長い旅を共に続けて来たそなたが、王の傷も考えずに、今のように無遠慮に求め踏み込んでしまえば、新たに深く重い傷をつけるのは必至」

のう、アシャ。

「私はそなたの気性を読み損なってはおらぬはず。じゃが、そなたは今までそなたを想って受け入れられず、なおもそなたの側に居なくてはならぬ苦しみを考えたことはないだろう。それはな、どれほど強き心も挫く、鋼の楔よ」

「……………」

「我らが王は、おそらくはそれを知っておる……ゆえに、もしそなたの想いに応えられぬとなれば、王は我が身を削るように苦しむことじゃろう……長き旅を続け、命の狭間を共に手を携えて切り抜けて来た、かけがえのない友、ゆえに、な」

「……………」

次第に俯いていくアシャに向けて、ラフィンニのことは激さなかった。

まるで遠い昔にそっくりの出来事を経験した知患者のように、深く重く柔らかく、けれど断固として揺るがない意志を秘めて続く。

「あれほどの傷む心に、新たな傷を加えるよりは、手を尽くして我らの王として頂き、この『狩人の山』（オムニド）の聖女王（シグラトル）としてこそ、世に名を遠く広めさせよう」

ラフィンニの声を頭上に、アシャの脳裏に旅の場面が次々と過ぎていく。

いつもいつも、アシャの腕を擦り抜けていくユーノ。

アシャの知らぬところで傷つき倒れ、血を流しているユーノ。

そのユーノに、アシャは何ができたのか。

（俺は……狡い）

ユーノのためには『泉の狩人』（オーミノ）の聖女王（シグラトル）に納める方が安心だ。世界の動乱は激しくなるだろう。ラズーンの安全領域も守られなくなるだろう。ラズーン支配下（ロダ）にあっては、その中で、ユーノが傷つかない可能性は無に等しい。

（俺は、さもしい）

それでも、アシャは、ユーノが欲しい。

（俺は、自分勝手に、独りよがり）

ユーノが側に居てくれさえすれば、アシャはまだ自分を失わずに済む。

（お前が…俺を守っているんだ、いつも、いつも）

アシャの唯一無二の存在意義を。

世界を滅ぼす、魔物にならずにすむ、道を。

そうしてまた、アシャは、ユーノの安寧よりも、自分の願いを取る愚かな自分に気づいてしまう。

（ユーノ）

この名はもう封じられる。

（ユーノ…俺の、ユーノ）

それでも、側には、居てくれるのだ。

「……わかった」

低い声で同意した。

「俺は、ユーノへの想いを、二度と告げはしない…っ」

「ほ、ほほほほほ！」

ラフィンニは高らかに笑った。

「それでこそ、名に知れた戦士、アシャよのう？ ……誰かおらぬか？」

「は、ここに」

「おおセール。アシャ殿を『沈黙の扉』にお連れしなさい」

「では！」

弾んだ声が喜びを放つ。

「そうよ」

ラフィンニは含み笑いをする。

「アシャ殿は、我らの代わりにユーノ様を守ると約束してくれたのだ」

「それはそれは有難き！ アシャ殿、我ら一同、心より感謝申し上げますぞ」

うわべばかりを持ち上げた声にぎしり、と奥歯を噛んだ。

「……失礼する」

立ち上がる。視界が薄闇に閉ざされそうになるのを懸命に堪える。

（俺が、ユーノを、護る）

確かにそれは願ったことではあった。

だが、こんな形で望んだものではなかったのだ。

（俺は…影になる）

ユーノという光の背後を常に護る一つの影に。

その想いが呼び寄せる危うさを、アシャはまだ気づかない。

「ほほ……ほほほほ……ほほほほほほ……」

背後に響くラフィンニの笑い声に振り向くこともなく、アシャは重い足取りで部屋を出て行った。

その『扉』は、神殿より少し離れた巨岩に作られていた。

『狩人の山』（オムニド）を埋める雪の中、神殿から蒼石の渡り廊下が扉までの距離を繋ぎ、人を導く。廊下の突き当たりには小さな四阿がある。八本の支柱で囲まれた空間の正面に、ごつごつした岩に不似合いなほど繊細な水晶で作られた扉がはめ込まれている。幾何学模様を飾り帯のように散らせた幾重もの縁取りは、内側になるほど複雑精巧となり、見る者にこれを作り上げた人々の苦労を思わせた。

今、四阿の中で、その扉に向き合い、これを囲むようにして、青衣の裾を風になびかせ、白骨の顔に艶やかな髪を乱れさせた九人の『泉の狩人』（オーミノ）が立っている。各々が白い腕を手首のあたりで、胸の前に交差させ、何かを深く祈るような気配だ。

そこに、セールが同様の格好で端に並び、十人の狩人が揃った。

「開こう」

セールがふいに声を張り上げた。

「我らが沈黙を」

もう一方の端の狩人、ウォーグが応じるように受ける。

「開こう」

セールの隣の狩人が続ける。

「今ここに」

ウォーグの隣が応じる。

「開こう」

「約束は交わされた」

「開こう」

「長ラフィンニとアシャにより」

さざ波のように左右へ言い交わされながら、呪文は広がった。唱えながら、狩人が一人、また一人と腕を左右に開いていく。隣に立つ狩人と微かに重なる白い腕は連なる生身の鎖のようだ。

「開こう」

風が寒々しい音をたてて吹き過ぎ、最後の一人、カイルーンが口を開いた。

「ここに我らが封印を解き、沈黙を破る者への呪いを込める。開くがよい、『沈黙の扉』よ」

すうっと水晶の中心に細い光が走った。やがて音もなく中央から二つに割れた扉が奥へと開く。

中はそれほど広くない。狩人達が全て入り込めば、ぎっしりと空間が満ちるだろう。

開いた扉の正面にただ一人、華奢な体を横たえて目を閉じているユーノの姿があった。額には透明な輪、時折漏れる、弱々しくも清冽な呼吸が響く。

一瞬、何もかも捨てて飛び込みたくなる衝動を、かろうじてアシャは堪えた。

「アシャ」

背後からのラフィンニの声に、振り返らない。

「知っているだろうが、この岩屋に人の声は禁物……僅かな囁きでも天井の剣は震えて落ちるぞ」

「わかっている」

言葉少なに答えて、アシャは扉の前に立った。手にした『聖なる輪』（リーソン）が、ユーノの『聖なる輪』（リーソン）と共鳴し、身を震わせる。

それを扉の外に残し、静かに岩屋の中に踏み入った。一步、また一步とユーノに向かって近づいていく。

視界の端に天井を埋め尽くす煌めく水晶の塊がちらつく。

物音で水晶は崩れない。だが、一言でも声をたてたが最後、天井から吊り下がった美しくも残忍な装飾品は、雨のようにユーノを穿つだろう。

「う…」 「…」

アシャの接近に何かを察知したのか、それとも開いた扉からの冷気を感じたのか、ユーノが微かに呻き、アシャはぎくりとして足を止めた。ズツ、と頭上で擦れるような音が響き、ばらばらと透明の砂が降り落ちてくる。息を詰めて身動き一つしないアシャの髪に、肩に細かな破片が当たる。

そろそろと視線を移して、アシャは天井を見上げた。全く動かないかのように見える天井の水晶、気のせいだったのかと安堵しかけて、眉を寄せる。違う、今、目の前で、子どもの体ほどもある紫水晶の塊が、ゆるゆるとその根を天井から抜きつつある。

急ぎ、落下予測を目算する。尖った先端は、ユーノの心臓真上より腕一本長、離れているか。抜け落ち方によってはユーノを直撃しかねないが、ユーノを庇おうとして飛び込む振動で他の水晶が抜け落ちかねない。

歯を食い縛ってアシャは静止したまま待ち続けた。目の前でユーノを貫かれる恐怖と自分がその惨劇を招く不安の天秤がゆらゆらと揺れる。

「…っ」

ズン…ッ。視界をまっすぐ落ちた水晶は、重い音をたててユーノの腕を掠めて床に食い込んだ。傷みがユーノを目覚めさせたのか、苦しげに仰け反る相手を凍る想いで見つめる。

（頼む）

静かに足を踏み出す。次の水晶がどこまで持ちこたえてくれるか、保証はない。

（苦しいだろうが、それ以上、声を上げるなよ）

駆け寄りた、走り寄り、体を投げ出して守りたい、だが、落ちる水晶はアシャの背骨を軽々と砕いてユーノを叩き潰すだろう。

息を細く吐きながら、ゆっくりと、影が這うようにゆっくりと歩を進め、ようようユーノの側に辿り着き、そろそろと膝をつく。

「…」

左の首筋から肩にかけて喰い裂かれたような傷が目飛び込んだ。こんな傷を負わせたのか。シズミィ相手にどれほど抵抗できたはずもない、なのに、こんなに酷い傷を負わせるまで戦わせたのか。

怒りに叫びたくなるのを必死に堪える。特別な祈りに伏すように、体を倒し、そっとユーノの肩の下に手を差し入れる。今度は確実に痛みが意識を呼び戻したのだろう、苦痛に強く潜めた眉の下で、ユーノの瞳がうっすら

と開かれた。

潤む、至上の、黒曜石。

「あ…」

呟こうとした唇に優しく、けれど容赦なく口を重ねて呼吸と声を呑み込んだ。もがいて拒もうとする体を一気に胸に抱き込む。

「んむ」

顔を逸らせて口を離そうとするのを追って塞ぐ。強く掴んだ肩の激痛にユーノが仰け反る。見開いた瞳がたちまち茫洋と霞み、額からにじんだ汗と涙が次々と頬に顎に流れ落ちる。悲鳴を上げたいのだろう、だが唇はアシャの支配下にある。

かちかちと口許で小さな歯が音を立てるのを感じながら、アシャは片膝をつき、立てた膝にユーノの体をもたせかけて、呼吸が少し落ち着くのを待った。すがろうとする手が虚しく揺れて、アシャの腰を叩く。何事も囁こうとするように唇が動きかけるのを、より深く覆って呑み込み、封じた。

「……………」

僅かな抵抗が消えた。ぐったりと目を閉じるユーノを見つめながら、されるがままの体をそっと抱き上げていく。体が捻れ、抱え込まれる姿勢に左肩が疼くのだろう、堪え切れぬように跳ねるユーノは、まるで拷問を受けているような顔だ。

(まるで、無理に抱いているみたいだな)

凍った心でアシャは思う。

腕の中で動きを封じられ唇を奪われ、アシャの動き一つにびくりびくりと震えるユーノの姿、閉じた瞳はアシャを見ない、くたりとした指先はアシャを求めない、その姿のどこにもアシャへの愛情は愚か、友情さえもない。

(所詮、俺は)

こうしてお前を苦しめて奪うことしか出来ない男だと言うことなのか。

これほど近くに身を寄せるなら、甘やかに色づいた肌に触れたかった。優しい声音で受け入れて欲しかった。熱く湿った指先で、アシャをも求めて欲しかった。

(全て、夢だ)

どうして俺は、もっと早く、お前に跪かなかったのだろう。

どうして俺は、もっと強く、お前に願い出なかったのだろう。

お前を与えてほしい、と。

(どうして、俺は)

一番欲しいものを、失う時にしか見いだせないのだろう。

(わかっている、愚かだからだ)

男としての意地だとか、これまでの経験だとか、生まれや気性や自分の役立たずな外見さえも捨てることができなかつたから、こうしてついにユーノを失ってしまうことになるのだ。

閉じた視界に柔らかく笑うユーノが居て、アシャは身を絞るほど切なくなる。

(俺は、お前を、失うんだ)

思わず願った。

誰かこのまま、俺を切り裂いてくれ。

「ほう」

「唇で声を封じるか」

さて、どうしてユーノを助け出すのかと、戸口で見守っていたセールが微かな笑い声をたてた。他の狩人も、アシャの煩悶を格好の見世物とばかりに眺めている。

「さては気障な男じゃ。こんな時でも伊達男ぶりを発揮するとはな」

「気障なばかりでもあるまい」

「長…」

ラフィンニの声に振り向く。

「考えてもみるがいい。ユーノ一人では身動きならぬ。娘を岩屋から連れ出そうとするのなら、抱いて運ぶしか手はあるまい。あの傷で抱き上げられ抱え込まれるのは激痛、自然、呻き声の一つや二つは零れよう。が、ここは『沈黙の扉』の中、声を上げれば無数の水晶の塊が彼らを押し潰し刺し貫く……………ならば、如何にしてユーノの声を封じる？」

「猿ぐつわなりと何なりと」

おどけたような声が響いた。

「そういう荒事ができぬ男でもありますまい」

ラフィンニは微かに頷き、問いを重ねる。

「『あの』アシャが、己の命を引き換えにしようとしてまで惚れた娘に、か？」

「それに、猿ぐつわでは、呻き声を封じられぬ」

くすくすと別方向からからかう口調が応じた。

「半端に開いた口で呻かれては、元も子もない。好き者ならば別であろうが」

「そう言えば…」

ウォーグが思い出したように、岩屋の中のアシャを見やった。

「アシャの傷はまだ完治しておらぬはず」

「完治どころか、塞がってもおらぬわ」

ラフィンニの促しに『泉の狩人』(オーミノ)達がどれどれと覗き込む。

「なるほど血の匂いがする」「また新しく滲む気配じゃ」「アシャにはよう似合うておるが」

「その傷をおして宙道(シノイ)を開き、あの娘を救いに来たというのに、娘の命と引き換えに心に鍵を掛けねばならぬ」

ラフィンニは珍しく、憂うような優しい口調で続けた。

「名のある戦士でも娘の体ぐらいいは手に入れようともがこうに……さすがアシャじゃな、あの口づけ、娘への別れを告げるものと見た。武人の誉れも高いアシャのこと、おそらくは二度と娘の唇に触れまい」

外でかまびすしく騒ぐ『泉の狩人』（オーミノ）達の声が聞こえているのかいないのか、ユーノを抱えて口を塞いでいたままのアシャが、緩やかに動き出した。抱え込み抱き上げる、その瞬間、苦しげに眉を寄せたのは、ユーノの口を塞いでいるためだけではないだろう。強張る体が傷みの元を教える。ひよっとするとユーノの口に、自分の悲鳴を注いだのかも知れない。

だが、アシャは動きを止めなかった。抱き上げたユーノと口を重ねながら戸口へ向かって歩いてくると、静かに一歩、戸口の外へ踏み出したと同時に顔を上げた。

「ふ、う…」

口を離されたユーノが溜め息のような声を漏らして軽く仰け反る。それをそっと支えて我が胸へ抱き直し、アシャは優しく髪に唇を当てた。胸にもたれてくるユーノの頭に、目を閉じ、頬を寄せる。

場所が『狩人の山』（オムニド）でなかったなら、双方傷を負っていなければ、それは穏やかな昼下がりを楽しむ恋人達の寄り添う姿に見えた。

甘やかな時は数瞬。

唐突にアシャは目を開く。自分達の逢瀬を興味津々で見守っていた目を照れもせずに見返す。

「では、頂いていく」

むしろ爽やかな声音が宣言した。

「我らが聖女王（シグラトル）じゃ、大切にさせて頂こう」

「安心しろ」

ラフィンニの確認に、冷淡に澄み渡った紫の瞳が応じる。

「二度とこんな目に遭わせない」

「そのことば、誓いと受け取っておこう。ユーノ様の傷は我らが念で包んでおいた。悪化はしておらぬはず」

「適切な処置に感謝する」

淡々と言い放ち、くるりとラフィンニに背中を向ける。伸びた背筋、俯き加減の首筋に金色の髪が幾筋も汗で張りついている。

アシャもまた、激痛を堪えている。

すぐに、その傷みは目に見えた。渡り廊下を歩くことなく、雪の上を歩み去る足下は、薄紅に染まっている。

だが、歩みは止まらない。ユーノを抱く腕が震えることもない。

誰もどこへと尋ねなかった。アシャが進む前方の空間に、きらきらとした金色の輪が、陽の光が残した傷痕のように浮かんでいる。

「……」

その前に立ち止まったアシャは、無言で念を込めた。ゆらり、とアシャの体の周囲が黄金の靄を漂わせ、揺らめく陽炎のように霞む。

次の瞬間、ばこり、と不気味な音をたてて、その輪の中が真っ黒に変わった。透明な泉の中に突然現れた闇のよう、目にした誰もが踏み込むのを恐れるだろう底知れなさだ。

アシャはたじろがなかった。ことさら身構えることもなく、むしろ薄い笑みを浮かべて足を踏み出す。

「…」

所詮、俺は。

呟いたことばの先は聞こえない。

雪の上に点々と鮮血を滴らせた跡を残し、アシャは闇の中へと姿を消した。

3. 幻遙けく

細かい砂が流れ落ちているような音が響いている。遠く微かに鳴る音は、ユーノの耳に優しく届く。そして、もう一つの音も。
 (雨が…降っている…)
 ユーノはぼんやりと考えて、重なって聞こえるもう一つの音の正体を突き止めようとした。
 すう……すう……すう……すう……。
 (吸って……吐く……吐いて……吸う…)
 それが規則正しい安らかな呼吸の音だと気づいた瞬間、ひやりとする冷たい風が身体を掠めて、ユーノは小動物のように身震いした。
 途切れることなく響いていた呼吸音が止まり、かわりに低い、けれども厚みのある豊かな声が問いかける。
 「ん……冷えてきたか？」
 ぱたり、と戸が閉まる音がした。雨の音が遠くなり、続いてそっと自分の身体を温かな腕が包むのを感じる。
 「これでどうだ？」
 (あたたかい)
 答えようにも唇が動かなかった。ただ体から力が抜け、それで相手はユーノが頷いたと感じたようだ。
 しばらくの沈黙。
 やがて、
 「まだ……眠り続ける気か、ユーノ」
 不安げな、じれったそうな声が耳元で囁いた。吐息が耳朶に触れる。
 「このまま、永久に目を覚まさない気か…？」
 耳の穴に直接吹き込まれた声が背筋を走って、微かに震えた。寒さを感じていると取られたのだろうか、少し強く相手に抱き寄せられる、が、左肩を刺し貫かれるような傷みが走って、ユーノは思わず体を震わせて目を見開いた。
 「あ、っ……っ」
 「ああ、すまん、傷に触っ……ユーノ！」
 真正面に今にも零れ落ちそうなほど見開かれた至上の紫の瞳。
 (これは夢の続きなのか?)
 思わず訝った。
 (私は『狩人の山』(オムニド)で倒れていたはずだ)
 シズミィに喰い裂かれ、雪の中に激痛とともに倒れて意識を失っていたはずだ。
 「おい…？」
 「…アシャ……？」
 瞬きして相手を眺め、乱れた髪や薄く開いた唇を眺め、滑らかに光を跳ねる肩と腕を眺め、そろそろと見下ろしていく視界に、半裸状態のアシャが自分を深く抱え込んで横たわっているのに気づき。
 「っ、アシャっ、わたし……っ!!」
 「ばかっ、無茶するな！」
 アシャの警告は一瞬遅かった。見る見る全身熱くなってともかくにもこの状態から離れようと跳ね起きた瞬間、さっきの数倍の激痛に意識を砕かれ、気が遠くなって倒れ込む。身体が竦み吐き気がして再び闇の中へ落ち込もうとしたユーノを、ぐっ、と柔かく力強い腕が抱きとめてくれる。
 「ユーノ！ おい、ユーノ!!」
 耳を貫くような高い音が響き渡っている。視界がぐらぐらして体の左半分がごそりと削られたようだ。その想像に吐き気がして喉を鳴らし俯いて、必死にアシャにすがった。
 「、っ、」
 やがて少しずつ、激しい耳鳴りが納まってきて、体の節々を締めつけていた力が弱まり、逆にどんよりとした疲労感が満ちて来て力が抜ける。最後の体力を使い切ってしまったような感覚だ。
 「…まったく…」
 低いアシャの声が、頬を寄せている胸を伝わって聞こえてきた。
 背後に微かに雨の音が続く。
 「……お前って奴は」
 困惑と諦めの籠った重い溜め息。ユーノの肩が強く擦りつけられているのを庇うように包んで、もう少し深く抱き寄せられた。手が頭をそっと引き寄せる。髪に吐息がかかる。
 柔らかくて甘くて、このままとろりとアシャの体に溶け込みそうだ。
 「私…どうしたの…？」
 何度か口を開いて頑張っ、ようやく出た声は、掠れて淡かった。
 「どうしたが聞いて呆れる」
 アシャの口調が少しおどける。
 「俺をぶん殴って、『使者の輪』を奪って、『狩人の山』(オムニド)へ乗り込んで、シズミィとやり合っ……無茶以外の何がある」
 淡々と事実を並べる声に、怒ってはいないようだほっとした。
 「……ああ……そう……だっけ…」
 シズミィとやり合った、勝ち目はなかった、それだけではない、途中何か禍々しい予感というか気配のようなものに絡みつかれて、何をやっても無駄だ生き延びられないんだという感覚に手足が麻痺したような状態で動けなくなり、次の瞬間左肩から首にかけて激痛を感じるや否や意識を失った、ように思う。
 「そうか……私……あそこで…」
 呟いて、何かが抜け落ちている気がして瞬きした。
 「あそこで……」

息を呑む。

「、使者はっ…？」

叫ぶだけでも体が痛かった。なのに、アシャは答えない。

「アシャ…？」

失敗したのだろうか。『泉の狩人』（オーミノ）はユーノの所行に呆れ果てて、『運命（リマイン）』につくとも答えてしまったのだろうか。

思わずアシャを振り仰ごうとしたのに、肩を抱いていたアシャがなお深く両腕を回してきて、呼吸をするのが苦しくなるほどすっばりと抱き込まれてしまった。

「アシャ…」

「…ユーノ…」

ためらうような優しい声。

では、やっぱり駄目だったのだろうか。それが知らせる破滅の足音を聞かせまいと、アシャはこれほど深くユーノを包んでくれているのだろうか。小さな子どもが必死に作り上げた泥団子を、よしよしと受け取ってくれる大人のように。その泥団子を食べないのは、幼子が嫌いだからではなく、無知であるだけなのだと思わせようとしているのだろうか。

重ねて問うのも怯んでしまって、ユーノは唇を噛んで糾弾を待った。

だが、アシャは動かない。何も言わない、いやむしろ。

（…アシャ…？）

髪にそっと押しつけられたものが何か、すぐにわかった。熱っぽい吐息を含んだ唇が、何度も、何度も、ユーノの髪に触れていく。

大丈夫だよ、怯えるな、破滅はお前のせいじゃない。

まるでそう言い聞かせるような気配に、ユーノは滲んでくる視界を閉じた。

（ひどいよ、アシャ）

ユーノだって、それなりに修羅場は潜ってきている。どれだけ頑張っても、どれだけ命を賭けても、叶わない願いがあることぐらいはわかっている。

（言っよ、駄目だったんだって。お前のしたことは、間違ってたって）

そんなに優しく宥めるように、そうだまるで、直接は触れられない恋人に愛撫を繰り返すように口づけされると、誤解してしまう。

（私は大丈夫だから、言っよ）

慰めはいいから、厳しい現実に向き合わせて欲しい。

（でなきゃ、でなきゃ、私）

ただでさえ生き死にの境を越えた心は脆くなっている。アシャの優しさを、思いやりを勘違いする。こんなふうに抱き締められて、優しいキスを繰り返される、その行為が別のものだと感じてしまいそうになる。

「…っ」

苦しくて切なくて、腕を突っ張ろうとしたが体が動いてくれなかった。零れた涙は情けない自分が悔しいからだ。こんな非常時に、こんな厳しい状況に、ユーノを責めることもなく、黙って慰めてくれている優しい人の仕草を、自分への好意だと勘違いしたくてたまらない、自分の浅ましさにうんざりするからだ。

（ひどいよ……）

零れた涙がアシャの胸に落ちたのだろう、ぴくりと震えたアシャが腕を緩めてくれて、その僅かに開いた空間の心細さに一気に涙が溢れた。

「あ……う…っ」

どうしてこんなに自分は未練がましいのだろう。

どうしてこんな優しい人を自分勝手に思い込めるのだろう。

どうして自分はこんなに足りないのだろう、姿形も心も、魂までも脆い。

「うっ……ひっ……っく」

嗚咽にアシャは黙ってユーノを抱え続けてくれた。静かに髪に頬をあてて黙っていてくれる、その甘さに涙が止まらなかった。

もっと強くなりたい。

もっと、もっと、強くなりたい。

こんな時に誰かに慰めてもらうのではなく、厳しくなった状況に、大丈夫だと笑いながら次の一手を打てるような人間になりたい。

（でなきゃ、アシャを護れない）

「…ん…っく」

開いた空間を埋めるように、再びアシャが抱き寄せてくれる。遠くなっていたアシャの胸の鼓動が、また近くで鳴り始める。瞬きして、その音を聴く。

（生きている……音…）

鼻を嚙り、目を閉じた。温もりと、鼓動と、繰り返される静かな呼吸に、気持ちが少しずつ穏やかになっていく。

（気持ちいい…）

人のぬくもりは、こんなにも、甘いものなんだ。

「ふ…う…」

吐息をついて、その感覚をただひたすらに貪った。

「……」

どれほどの時間がたったのだろう。

夢現の世界を彷徨っていたユーノの耳に、再び雨の音が響き始めている。疲れ切っていた心が、いつの間にかもう一度、輪郭をはっきり取り戻している。

「…使者は……無事に済んだ」

雨音の合間を縫って、アシャの声が響いた。

「『泉の狩人（オムニド）』は『運命（リマイン）』につかない」

「…そう…なんだ…」

まだぼんやりしながら、ユーノはゆっくりと目を開けた。

視界がひどく明るく鮮やかに澄み渡って見えた。

「俺は、『泉の狩人』（オーミノ）達と…」

続くアシャのことばを、どこか茫然と聞き流しながら、ユーノは、ふいに、濡れた頬を押しつけている場所の違和感に気がついた。

ざらざらした布の感覚。

けれど、アシャは上半身は服を着ていない。

視線を動かし、頬の下にある真っ白な布を眺める。それはぐるぐるとアシャの胸に何回も巻きつけられた包帯だ。

「…！」

ずさり、と何か固くて冷たい刃が体の中心を落ちていった。顔が強張る。

「……アシャ…」

「で、俺は……え？」

「傷…治って、ないの？」

「…」

困惑したような沈黙。どんな顔で自分が見下ろされているのか考えるのが怖い。

「治ってないのに、来てくれた、の？」

あまつさえ、今ユーノはこんなふうに甘え切っている、傷ついたアシャの胸にべったりと。その傷みを思いやることさえなく。

「ユーノ、俺は」

「…ご、めん」

一気に干上がった口がなかなか開かなかった。顔が熱くて、体が熱くて、恥ずかしくて、辛くて、なのに心の中心が凍りつくほど冷えている。

「ごめん、やっぱり、私、疫病神なんだ……」

一体何を考えている。一体何をしている、こんなところでのうのうと。

脳裏を走った幾つもの顔にユーノは震えた。

「私がいる、から、レスやレアナ姉さままで、狙われて、あなたは、関係、なかったのに、こんな傷で、助けに来なくて、よかったのに」

ごめん。ほんとうに、ごめん、なのに、わかっていなくて、ごめ…

「ユーノ！」 「っ！」

突然ぎゅっと激しく抱き締められて、思わず声を呑んだ。左肩を掴まれなかったのが幸い、それでもじうんと熱を上げる肩に、アシャが顔を伏せた。ふっくらとしたものが、静かに押しつけられる。続いて叱りつけるような、そのくせ優しい声が響いた。

「ばか」

「…アシャ…」

「そんなふうに考えるんじゃない。レアナやセアラ、セレドをカザドから護ってきたのは誰だ？ レスファートが捜し求めるのは誰だ？」

「で、も…」

私がいなければ、よかったんじゃないの…？

(サルト)

視界を覆う涙に呻く。

「生まれ間違っただんじゃない…なくて……生まれなければ……よかったんじゃないの……？ このまま…じゃ…

…いつか……あなた、も…」

「違う」

「で……も…」

「違う」

俺は、大丈夫だ。

アシャはユーノの左肩に顔を伏せたまま、囁いた。

「何があっても、俺は、大丈夫だ」

俺の命を大事だと思ってくれるなら、お前の命も同じぐらい、大事だと思ってくれ。

「頼むから…」

アシャの声が詰まった。

「忘れるな、ユーノ、お前は、俺の」

「……アシャ」

「お前は、俺の」

アシャを振り向こうとした頭が静かに押さえられる。肩から首に傷を労るような小さなキスが落とされ、元のように抱え込まれた。

沈黙。

その代わりに、与えられたのは、髪へ、こめかみへ、涙に濡れた目元に落とされた優しい唇。

その唇が、妙に震えて切なげで、ユーノは目を閉じ息を詰める。

私は、アシャの。

「……かけがえのない」

かけがえのない。

「……仲間、だ」

「……」

一瞬強張った体を気づかれただろうか。見開いた視界から溢れ落ちた涙を、アシャはどんな意味にとっているのだろうか。

「……いつまで…？」

仲間。

「俺はお前の付き人だからな」

強いて元気そうに響く声。

「……じゃあ、セレドに戻るまで、かな」

「……ああ、そう、なる、な」

アシャの顔を振り上げなかった。まっすぐに前を見たまま、何とか笑った。

レアナの妹で、セレドの第二皇女で、付き人であるアシャの、仲間。

(勝手に死ぬことも、許されなくなった)

「……わかった」

ゆっくり目を閉じる。

「……ボクは……アシャの、仲間、で、いる」

「……お前を連れて逃げよう
この世界の果てまで逃げよう
死の女神も
運命さえも
追いつけない夜を逃げよう

お前を連れて逃げよう…」

「…あれは…」

ミダス公邸の回廊の中、リディノは立ち止まって首を傾げた。降り注ぐ陽射しの中、花粉を運び蜜を集めるブーコ飛び交い、ラフレスをはじめとする花々の薫りが溢れ満ちる苑から、憂いを含んだ豊かな歌声が聴こえてくる。

「…珍しい。アシャ様のように…」

側に付き従っていたジノも、瞬きをして花苑を見やった。

「そのようね」

頷いて、リディノは数日前のことを思い出す。

アシャが出て行ってから不安な夜が続いていた。

リディノはジノの昔語りを聴いて夜を過ごすことが多くなったし、レスファートも彼女の側で膝を抱えて過ごすことが増えていた。

大切な人が側にいない。

大切な人が戻らない。

側に温もりがないだけで、人は容易く、一人ぼっちで荒野を彷徨っていた原始の夜に引き戻される。

仲間はどこだ。

背中を温め、ひもじさを分かち合い、危険に寄り添い、互いの盾となるべき者はどこへ行った？

ジノの声だけが、唯一闇に抗する呪文でもあるかのように、いろいろな詩を繰り返しねだって歌わせ続ける。レスファートもそのうちの幾つかを覚えては歌い、それでささやかな慰めは得るものの、そんな夜が繰り返された後は、疲れ切ってベッドに入ることもなく、ジノに叱られつつも、床の敷物の上で二人、身を寄せ合って眠ってしまう。

そんなある夜、ふと何かのざわめきがして、リディノは体を起こした。

窓の外に細かな砂を落とすような音が満ちている。雨が降っているのだ。

だが、いつもなら、雨は公邸に沈黙をもたらすものなのに、この雨はひどく騒がしい。

「どうしたの、リディ…」

眠たげにレスファートが見上げてくるのに首を振る。

「さあ…何か…」

ジノは側に居ない。屋敷が奇妙な興奮に揺れているような感覚だ。

と、リディノの答えを待つまでもなく、唐突にレスファートがびよこんと立ち上がった。扉の方をじっと見つめ、まるで草原に住む小動物のように意識を集めて目を凝らす。

次の瞬間、ぱっと弾けるような明るい笑みがレスファートの顔に広がった。

「レス?!」

「ユーノだ！」

いきなり部屋から走り出しながら、少年は高らかに宣言する。

「ユーノが帰ってきたっ！」

「えっ?!」

慌てて立ち上がり、同じように部屋を走り出たリディノは、回廊の向こうから、顔を紅潮させたジノが駆け寄ってくるのを見て取った。

「姫さま！」

その側をレスファートが駆け抜けて、まっすぐ入り口へ走っていく。入れ違いに距離を縮めてきたジノが、

「アシャ様がお帰りになりました！」

「アシャ兄さまが！」

身内が沸き立つような興奮が溢れた。

「はい、ユーノ様もご一緒です！」

「わかったわ！ ジノ、一緒に来て！」

「はいっ」

姫らしくない、ミダス公が見ていれば、そう窘められただろう。ドレスの裾を蹴散らすような激しさで、リディノは公邸の中を急ぐ。

(アシャ兄さま……アシャ！)

それでは皆無事なのだ。無事に生きて戻ってきてくれたのだ。

やがて赤々と灯のともった公邸入り口に、茶色のマントも革靴も、見事な金髪さえ濡れそぼったアシャが、そのマントで抱え込むように、白いチュニック姿のユーノを連れて入ってくるのが見えた。

「ああ、すまない」

迎えの者がいそいそと布を差し出し、濡れたマントを受け取ろうとするのに、アシャが溜め息まじりに謝罪して、ちらりと隣のユーノを見下ろす。

「ラズーンじゃ雨の日の方が少ないのに、わざわざ今夜帰るなどと言い出してな」

「何言ってるのさ」

苦笑したアシャをじろりとユーノがねめつける。

「アシャこそ、少しでも早く戻ろうって急かしたくせに」

受け取った布で濡れた髪を拭くユーノは元気そうだ。そこへ、
「ユーノお!!」
銀色の髪を振り乱して、レスファートがユーノの腰にしがみついた。涙で汚れた頬を容赦なくユーノに押しつけて、泣きじゃくりながら訴える。
「し、っ、しんっ…死んだっ…死んだ…って、アシャっ…アシャが…っ、いっ…いったん…もん…っ」
「ああ…ごめんよ、レス」
とても痛い場所をもう一度抉り直されたような悲痛な表情で、ユーノが唇を噛み、俯いて跪いた。二度と離すまいとするかのようにしがみついたレスファートを、包むように抱き締める。
「ごめんな…ほんと…いつも…ごめん…」
謝られても、もちろん、レスファートにはユーノに向ける矛先などない。必然、怒りはアシャに向けられる。
「あ…っ…アシャ…っ…なんか…っ…き…嫌い…だあ…」
「おいおい」
聞きとがめて、不服そうに唇をねじ曲げたアシャがレスファートを覗き込む。
「命の恩人に対して、その言い草はあんまりだろ、レス」
「だっ…だっ…え…っ」
なおも怒りをぶつけようと振り仰ぐ少年の顎をぐいと掴み、顔を深く覗き込む。
「ユーノを助けたのは俺だぞ？」
「う…っ」
ことばは失ってもアクアマリンの瞳の雄弁さは健在だ。たちまち大粒の涙をぼろぼろと零し、切なげに眉を寄せたかと思うと、噛み締めていた口を開いた。
「うっ、わあああ…っ」
「おっ」
「うん、今のはアシャが悪い」
うろたえて顎を離すアシャに、ユーノが頷いて断言する。
「ちょっと待て、ユーノ、俺は！」
「こんな小さな子を脅しつけたりして」
「いつ俺が！」
「いいよレス、怖かったよね、心配させたのはほんと、私が悪いんだ、ごめんよ」
口をぱくぱくさせているアシャにくるりと背中を向けて、ユーノはレスファートを抱え込み慰めあやしてやる。
。「
「ユーノおっ」
その胸に自分を溶け込ませるように甘えているレスファートを見ながら、リディノも溢れる涙が止まらなくなった。
「アシャ兄さま！」
飛びつき、しがみつく。
「ご無事だったのね、アシャ兄さま！」
雨に濡れた衣服からは戦場を駆け抜けたような埃と汗の匂いがした。今までアシャからそんなものを嗅ぎ取ったことなどないだけに、安堵とともに不安も滲む。
確かに噂は知っている、アシャは剣士でもあるのだ、戦の経験も重ねている。
だが、リディノにとって、アシャはいつも極上の微笑をたたえた上品な詩人、リディノの甘えを卒なく受け止めてくれる騎士だった。
「ああ、リディ」
耳元で囁かれる声はいつもより掠れている。それでも、いつも戻って来た時に与えられるキスは、優しく頬を撫でていく。
「大丈夫だったよ」
安心させる声音に戻って、リディノはほっとした。アシャが全く見知らぬ誰かになりそうだったのを、そっと胸の内に押し込めかけて、はっとする。
「兄さま、これは…」
しがみついた掌の下、薄い短衣の中に重なり合った布の感触があった。ざくりと体を強張らせて問いかける。
「怪我が、まだ…？」
「掠り傷だよ、すぐに治る」
アシャは快活に応じた。
「それより、リディ…」
だが、続いたことばはリディノの耳には入らなかった。
包帯を幾重にも巻かなくてはならないような傷。
そんな怪我が掠り傷などではないことは、リディノにもよくわかっている。百歩譲って、リディノが案じるほどの傷ではなかったのだとしても、治りかけているような傷をいつまでも包帯で覆っておくようなアシャではないことを、リディノはよく知っている。
(そんな傷で)
胸の内に湧き上がった黒い雲。
(そんな傷を押し…ユーノを助けに向かわれたの…?)
何だろう、この不愉快で苦しい気持ちは。
(もし、私が)
リディノが同じような窮地に陥ったなら。
(アシャ兄さまは)
「リディ？」
「あ、はい」
改めて呼びかけられて、リディノは我に返った。
「もう一人、お客様をお連れした」
アシャが背後の闇に呼びかける。
「レアナ姫、どうぞ」
「…っ」

薄暗がりの中から、一人の女性が近づいてくる。雨粒を宝石のように光らせた、栗色の波打つ髪、卵形の整った顔立ちは滑らかで白く、深く鮮やかな宝石を思わせる瞳はけぶるような睫毛に囲まれている。伸びやかな首筋、しなやかで気品ある物腰、一目見ればわかる、この女性こそ姫君と呼ばれるべき人であると。

ほっそりとした脚が、背後にイルファを従えて静かに歩み寄ってくる、と、一瞬、歩を止めた。

「……リディノ姫」

名前を教えられていたのだろうか、それにしても親しげな、まるで懐かしい友人に出逢ったような喜びが見る見る広がって、にっこりとリディノに微笑みかけた。

「レアナ・セレディスです。どうぞよろしく」

(綺麗な人だった)

ぼんやりと花苑から響いてくる歌声に耳を傾けながら、リディノはレアナの微笑を甦らせる。

(ううん、綺麗なだけじゃない……大人っぽくて、すてきな女性)

あれが名高いレアナ姫。

辺境の国にレアナ姫という類稀な美姫がいる、そういう噂は聞いたことがあるけれど、どこかで軽く見ていた、統合府であるラズーンに居並ぶ姫達よりも抜きん出ているはずなどない、と。飾りものもドレスも、夜会も作法も殿方達も、辺境の小国ならば限られているだろう、ラズーンのように諸国からの品々が巡っているとは考えにくい。そうした中で美しい姫、であるならば、きっと噂は風に巻かれて大きく高く舞い上がっているのだと

。事実、ユーノを見た時には、異質さに驚きはした、見知らぬ美しさを感じもした、だがそれは所謂『姫』の美とはまた全く別のもの、そう思えた。

だが、あの女性は違う。

リディノや『西の姫君』や、いや、夜会に集まるラズーン周辺諸国の姫君の誰と並んでも、決して引けはとらぬだろう。ラズーンの品で身を飾れば、溜め息ばかり零れる中を歩くことになるのだろう。

輝く大輪の花ではない。けれど誰もが、側で花開く様を愛しみ味わい楽しみたいと願う、そういう女性の極みとも言える美しさだ。

(ひょっとすると……アシャ兄さま、も)

「しかし珍しい」

ジノがほとほと信じ難いと言いたげな声で繰り返す。

「あのような熱烈な恋歌を、一体誰に謳っておられるのやら」

「恋歌？」

思わずぎくりと振り返る。

「あれは恋歌なの？」

「はい」

ジノは頷き、歌詞を誦んじるように目を閉じた。

「許されぬ恋をしたが、お前を諦め切れない。いっそお前を攫って、世の終わりまで逃げ続けてしまおうか。そして二人を引き裂く運命を欺いてしまおうか」

低い声で呟いて目を開ける。

「というような意味の詩です」

「そ…う…」

ならばアシャは許されぬ恋をしていると言うのか。

あのアシャが、想いを告げられぬような恋に苦しみ、詩に気持ちを吐き出していると言うのか。

(一体、誰に)

脳裏に閃いた、夜闇をほのかに照らすようなレアナ姫の笑顔。

(まさか)

「姫さま?!」

ジノの声にも振り返らず、リディノは身を翻して、花苑の中に続く扉を抜け、小道を走り出していた。

「お前を連れて逃げよう

月と星の谷間を潜り

天の流れを泳ぎ渡り

彼方の異国へ逃げ続けよう…」

立風琴(リュシ)の音が激しくかき鳴らされる、許されぬ恋人達の逃避行のように、極める甘い切なさに砕け散る悲鳴のように。

眉を潜め、目を閉じて、アシャが腰を降ろしているのは、かつてユーノが凶剣に倒れたその場所だ。

あの日ラフレスは紅に染まり、愛しい少女は連れ去られて遠く、突き立てられた剣だけが残ってアシャを嘲笑っていた。

(いつもいつも、ユーノは俺の腕から奪われていく)

目を閉じたまま、胸に砕けた傷みに顔を歪めた。

愛しい。

愛しい。

こんなにも、あの娘が愛おしくてたまらない。

けれど、その想いを告げるには、既に遅すぎる。

アシャの想いは、ユーノの命と引き換えに、あの『沈黙の扉』の中に封じ込められてしまった。

「お前を連れて逃げよう

草の波を蹴立てる白馬に

行く手を照らす金の星かけて

この世の果てまで逃げ続けよう…」

あの雨の日、ユーノが気づくまで、昏々と眠り続ける彼女を抱いて横になりながら、額に垂れかかる熱にうだつた髪の下で、幾度も考えていた、このまま連れ攫ってしまおうか、と。

だがその度に、ラフィンニのことばが耳に甦って、最後の決断をためらわせた。

(ユーノには、誰か、愛する者がいる)

自分の腕に包み込んでしまえるほど華奢な体には無数の傷痕、それはユーノを見えない鎖で縛りつけているかのように、滑らかな肌に白々とした刻印を残している。

その傷痕の理由を、アシャは半分も知らない。知り合わぬ前のは我慢ができるとして、付き人として側に

従いながらも、なおも知らぬ傷が増えていくという意味に、いいようのない苛立ちが広がる。
(俺が知らないところで、お前は繰り返し裂かれ、傷つけられ、倒れ込む……けれど、お前は怯まない、その度に何度も立ち上がり、再び渦中に飛び込んでいく。その気力の源には一体、誰の姿があるんだ…?)
唇の柔らかさは知っている。うなじの細さも、手足のしなやかさも、強く抱き締めて跳ね返る弾力や抵抗される切ない甘さも、十分味わったことがある。
(けれど)

ユーノの心だけがわからない。
たじろがぬ心の強さの源泉は、きっとどこかにあるはずなのだ。遠く離れたセレドの家族や民の安楽への願い、ラズーンへの忠誠、レスファートやイルファ達仲間への思いやり、そういったものより、もっと激しく強く、ユーノを支える何かの存在が。

(お前の体はここにあるのに)
眠り続ける体とは別に、ユーノの魂は誰かとともに遠く彼方を駆け去っている。たとえ、アシャが思いのままに、ユーノを組み敷いて蹂躪したところで、そうやって彼女を連れ攫ってしまったところで、ユーノの心は、何よりも欲しいその魂は、きっと、決してアシャの手には入らない。
それでも。

(このままお前を攫っていきたい)
そう叫ぶ心を宥めるのに、どれほど克己心を振り絞ったか。
「お前を連れて逃げよう
この腕に抱きかかえて
この胸に抱き締めて
時の境を逃げ続けよう

お前を連れて逃げよう……」

(ユーノ)
ツーン、と高い一音の余韻、最後の旋律に快楽を極める瞬間の解放を重ねて、アシャは口を嚙む。弾む呼吸を呑み込んで、内側を駆け上がり跳ね散る甘い波に堪えて、しばらく息を詰める。
静まり返った邸内には、人の声さえ聴こえない。最近いろいろと物騒な出来事ばかりが続いていた日々、その中にある空白のような平和な憩いに心を寛がせ、皆、うたた寝でもしているのだろう。
身動きしないアシャの側を、ブーコの羽鳴りが掠めていく。

「…ふ」
沈黙していたアシャは唐突に唇を綻ばせた。どこか甘く、どこか自嘲する気配の苦笑を浮かべる。

(どうしようもない、男というものは)
思い定めて、ゆっくりと目を開けた。
眩い陽射しの中、ラフレスが盛りを過ぎて咲き崩れようと艶を競っている。溢れかえる白の誘惑の彼方に、一瞬、花嫁衣装を身に着けたユーノの姿が過ぎていく。

(あんなことで、お前を俺のものだと決めてしまっている)
あえて花嫁衣装を選んだのはアシャだ。ユーノを広間に連れていきながら、この先何が起ころうと構わないと思っていた。

(俺のために着てくれるとは限らないのに)
むしろ、他の男のために装う可能性が高い、その運命に挑戦するような気持ちがあったのも確かだ。
奪えるものなら奪ってみろ。見る、俺はこの位置から引かないぞ。
幼くて向こう見ずな宣言、それが後々、まさか『泉の狩人』(オーミノ)の干渉によって覆されるとは思いもしない、ユーノの心を思いやることさえない、自己中心的で傲慢な男の雄叫び。
それはつまり、天誅だったのかも知れない。

ユーノにはふさわしき出逢いが既に定められており、それはアシャなど及ぶべくもないのだと、何度も示されたのに納得できず、歯ぎしりする前に認めることさえなく、ただひたすらに突っ走ってきた男に下された鉄槌。
それでも。

アシャは立風琴(リュシ)を置き、ごろりと寝転がった。
(結局、俺はユーノを追い続けるんだろう)
それこそ、他の男の所へ一心に駆けて行っているのかも知れないユーノを。その身の無事を願い、その心の安寧を祈り、ついに辿り着く、その瞬間に歯噛みする自分の姿を嘲笑いながら。

(止められないんだ)
請い伸ばす手が止まらない。
振り返る視線が外せない。
笑って見送って欲しいと望まれたなら、ユーノがアシャに望むものがそれしかないのなら、迷わず差し出すことがわかっている。

(俺を望んでくれ、ユーノ)
たった一本の指でもいい。
そのためなら、残り全てを犠牲にしても、ユーノの元に届けよう。
確かに想いを告げるのは封じられたが、想いそのものを封じられたわけではない、と自分に言い聞かせかけて、はたと我に返り、くつつつ嗤った。

(本当に、どうしようもない、男というものは)
無理もない、そうやって人は生き残ってきたのだ。
女という海の中に、自分を切り刻んで注ぎ込み、未来への時間を手に入れて来た。

(ただ、俺は…)
ゆっくりと思考が霞んでくる。ここ連日の疲労は、荒れ狂う心が静まっていけば、見る見る肉体の支配を取り戻す。四肢が重くなりだるくなり、地面に自らが吸い込まれていくような感覚の中、アシャは一瞬眉を寄せる。
(俺は…その繋がりの中には……最初から、いなかった…)
ならば、どこへ還ればいいのか。
幼い頃からの問いが柔らかに繰り返される頃、アシャは寝息を立て出した。

「……」

アシャが眠りに落ちて少し後、リディノはラフレスの花影からそっと顔を覗かせた。

「アシャ兄さま…」

小さく呟いて、果実のようなと評される唇をきゅっと結ぶ。

ジノを置いて駆けつけてきて、アシャが誰に恋歌を歌っているわけでもないと言って、一時はほっとしたもの、こっそり様子を窺ってしまったので出るにも出られなくなり、しばらく身を潜めて、陽射しの中で眩く輝くアシャの姿を見つめていた。

キャサランの金細工のように輝かしい髪。奥深い山で取れる紫水晶のような鮮やかで深い瞳。男性にしてはやや色白で、華やかな宮廷衣装を身に着ければ、姫君達よりも艶やかな姿。端麗な顔立ちは確かに女性的ではあるものの、響く声は柔らかく低く、耳を澄ませていれば天上の楽音もかくやと思われる豊かさ。甘く優しい仕草でダンスを誘い、この指先を導いてくれる巧みさ、すがりつければ、しなやかな体がしっかりと抱きとめてくれる確かさと温かさ。

(望まない娘なんて、きつといない)

だから、アシャは誰を想っても苦しい想いなどするはずがない、そう思っていた。

なのに、花の影で見つめていたアシャの横顔は、これまで見たどんな時の顔より情熱に満ちて、薄紅を帯びた頬に浮かんだ表情は官能的とでも言うのだろうか、見つめていると、体の奥が切ない波に疼くように思えた。やや掠れた声を無理に押し上げるような声音は、いつまでも聞いていたいような、けれど二度と聞きたくないような響きでこう叫んでいた。

お前が、欲しい。

「……」

ごくり、と唾を呑み込んで、リディノは静かに脚を踏み出す。

あの声は、何だろう。

誰に向けて、叫ばれたのだろう。

(一体、誰を想って、歌っておられたの?)

これまで、あれほど熱を込めてアシャが詩を歌うのを聴いたことがない。

もちろん、今までリディノに向かっても歌ってくれたことはある。どれも優しく甘美な声だったが、今さきほど聴いた歌と引き比べればはっきりとわかる。

あれらはどれも他人行儀だった。整えられ飾られ、丁寧に奏でられてはいるが、心が噴き出し溢れ落ちるような激しさは微塵もなかった。

(兄さま…)

間近まで近づいても、よほど疲れているのだろう、アシャは目を覚ます気配もない。そろそろと薄桃色のドレスに包まれた膝をつく。

(アシャ…)

「ん…」

さすがに振動が伝わったのか、アシャが軽く眉をしかめて顔を背けた。が、すぐにほわりと頼りなく口許が緩み、聡明そうな額に乱れた髪の毛のせい、無防備な子どものような寝顔に戻る。

以前、アシャはリディノにこう話してくれた。

『戦士が眠っている時に近づいて、相手が目を覚まさないとしたら、それは彼がリディノに心を許している証拠だよ』

「……アシャ…兄さま…」

リディノは微笑んだ。

先ほどまでの不安が、空を漂った薄雲のように消えて行く。

何を心配しているのだろう。アシャが名だたる剣士であることは間違いない。そのアシャが、今こうしてリディノがこれほど近づいても、目を開くことさえない。

それはそれほどアシャがリディノに心を許しているということではないか。無限の信頼がここに示されているではないか。

じっと見下ろしていたリディノの目が、ふと、アシャの唇に止まった。薄く開かれた唇は、つやつやとした薄赤に染まっている。

アシャの髪に触らないように、そっと両手を地面についた。そろそろと顔を降ろしていく。目を閉じ、微かな呼吸を目当てに、轟くように打つ胸の鼓動を堪えながら、唇を近づけていく…が。

「…ゆーの…」

「っ！」

アシャの唇が唐突に動き、掠れた声が零れてどきりとした。目を見開く、その耳が拾ったことばの意外さに、思考が追いつかない。そのリディノを嘲笑うように、アシャは再び、優しい不安げな声で繰り返した。

「…ユーノ……そっちへ……行くな…」

「…アシャ……」

聞いたことのない声、だが、その声色に感じ取ったのは、紛れもなく、さっきの恋歌に含まれていた切ない、愛しい、熱っぽい懇願。

(まさか)

視界が衝撃に眩み、歪む。

否定しようとする心を嘲笑う確信。

「、う…」

ドレスの裾がアシャに触れないようにかろうじて捌いて立ち上がり、リディノは走り出しながら漏れかけた鳴咽を必死に掌で押さえ込む。

(ユーノ？ ユーノ？ 兄さま、ユーノ、そう、呼ばれたの?)

信じられない。

ユーノ、あのユーノが、アシャの想いの相手だと言うのか、あの、あの、あの、傷だらけの、小汚い姿で現

れた、可愛らしさとも美しさともほど遠い、男のような、あの子が。

(ユーノ? どうして? どうしてなの、アシャ兄さま?)

心の中で繰り返しながら、花苑を抜け、回廊を駆け、部屋の中へ飛び込んでいく。

「姫さまっ?!」

うろたえたようなジノの声を背中に、ベッドへ身を投げ出した。両腕で顔を覆い、体を竦めて踞る。心の中に、今まで感じたことのないどす黒いものが蠢いている。

(レアナ姫ではなくて、ユーノなの? 私ではなくて、ユーノなの?)

なぜ? なぜ? なぜ?

「姫さま?」

「来ないで!」

自分の声がひび割れていた。

「姫さま」

「来ないでジノ! 私きつと、とても嫌な顔をしているわ!」

そうだ、この感情を知っている。今まで知らぬふりをしてきたが、幾度も感じてきたものだ。アシャが美しい姫君達と寄り添うたび、夕闇の中をそぞろ歩いたり、月光の中で逢瀬を重ねたと聞かされたとき、胸の片隅に燻りながら体の内側を這い昇ろうとしてきた闇。

「姫さま!」

ジノは一旦は引いた気配だったが、リディノの悲鳴じみた声がかたき事ではないと察したのだろう、すぐに駆け寄ってきてリディノを覗き込んだ。

「姫さま! どうなされたのです、姫さま!」

「…ジノ…ジノ!」

呑み込まれるわ、私。

「ジノ…私…」

助けてちょうだい、こんなもの、私は要らない。

ひくひくとしゃくり上げながら、リディノは顔を上げた。自分をずっと守ってきてくれた顔が、温かな心配を浮かべて見下ろしている。

同じような心配を、おそらくはアシャもユーノに向けているのだ、この、自分ではなくて。

そう思った瞬間、溢れる涙が止まらなくなった。

「ジノっ!!」

「姫さま…姫さま…」

しがみついた胸は震えていた。それがジノがどれほどリディノを案じているかの証明に思えて、リディノは身悶えるように体を揺さぶった。

「私…私…私…」

何が間違っていた? ちゃんとラズーンでアシャを待っていた。何が間違っていた? アシャの安らぐ所を整え、守り、美しく装っていた。何が間違っていた? 無理を言わなかった、我が儘を訴えなかった、だだをこねなかった、アシャを困らせたことなどないはずだ。

なのに。

なのに。

愛情を全て受け止めるべく、あらゆる準備を整えてきた自分に、この仕打ちなのか。しかも相手はレアナではない。至上の美姫ではない。ごく普通の娘でさえない。傷だらけの、教養もない、剣を振り回し、人を殺すような娘。リディノとユーノの最大の違いは、ただ。ただ。

「……ただ……一緒に居た…だけだわ……っ!」

引き裂かれたような自分の声に、そっと体を撫でてくれていたジノの手がびたりと止まる。

やがて、密やかな声が囁いた。

「……大丈夫ですよ、姫さま」

「…っう」

「ご心配ごとはジノにお任せ下さいませ」

力強い口調にリディノは瞬く。嵐に揉まれた小舟のようだった心が、ゆりかごに揺られるように、少しずつ治まってくる。

「ジノ…」

「きつとうまくやっでご覧にいきますから」

「……ジノ…」

そうだ、とリディノは慰められつつ思う。

何を取り乱しているのだろう。

彼女はラズーン四大公、『銀羽根』率いるミダス公の一人娘、言わば、統合府ラズーンの聖なる姫なのだ。そして、アシャはラズーンの第一正統後継者。その称号(クラノ)を負う彼が、辺境の小国の、ことさら目を惹くわけでもない姫に魅かれるわけがない。

「……ジノ…」

リディノは小さく頷いて安堵し、ジノは再びリディノの体を撫で始める。

薄く開いた戸口に一つの影が動いた。

その影が静かに歩み去るのに二人は気づかなかった。

ましてや、その影が視察官(オベ)ジュナ・グラティアスであることや、その顔に浮かんでいた、およそラズーン支配下(ロダ)にあるまじき、禍々しい笑みに、気づくはずもなかった。

夜は更けている。
静かな暖かい晩で、風が微かにそよぐ程度、鳥も眠り馬も眠り、墓場で憩う死者達さえも眠り続ける、そんな夜だった。

ミダス公公邸の一室、ユーノに与えられた居室には、ぼんやりと明るい月光が、開いた窓から差し込んでい
る。
ベッドで寝息をたてているのは、プラチナブロンドをくしゃくしゃにして丸くなっているレスファート、白い夜着に手足を縮め、時折小さな口を動かして何か呟いている。

当の部屋の持ち主、ユーノの姿はベッドにはない。
開けた窓に腰掛け、窓枠に凭れて腕を組み、じっと彼方の空を見つめている。夜着でさえない服装——チュニックに短い腹辺りまでの上着、腰には愛用の剣を吊るし、額に『聖なる輪』（リーゾン）という出で立ち——で、ユーノがたまたま起きていたのではないと誰にでもわかる。
遠くから風がゆっくりと吹き寄せて来て、ユーノは少し眼を伏せた。短く削いだ焦茶の前髪の毛先が、目元に乱れるのをそのままに、微苦笑を浮かべる。

（こんな夜に眠れない、なんて）
ふと思い出した。
以前、野戦部隊（シーガリオン）の野営の夜、見張りをしていたユーノにユカルが話しかけてきた。
俺達はこんな平和な夜こそ眠りにつけないんだ。戦いがある時は、敵がどこにいるのか、何を待っているのかわかる。けれども、こんな静かな夜は、敵の居場所さえも『夜の王子』（セトラート）の衣の影に隠れてしまわってわからない。どこからかやってくる敵の匂いを、一瞬でも早く嗅ぎ取ろうと、静まった夜気にぴりぴりと神経を尖らせちゃう。戦いから戦いへ、毎日を戦乱に明け暮れる俺達の性分というものかも知れないな。

（私も、性分かも知れない）
静かな夜ほど心が尖る。この平穏が偽物ではないかと訝る心を持って余し、一人何度もセレドの街をレノで駆けた。

これは真実か。
それともたまさかの夢にごまかされているのか。
それはいつも、心にあった危機感だ。平穏な日々という仮面を被って『何か』は確実に進み続けている。その『何か』に気づいていなければ、自分は大きなものを失ってしまうに違いない、と警告が響く。

（考えてみれば、カザドのことだけじゃなかったんだ）
ユーノの敏感な心に聴こえていたのは、揺れ動く諸国動乱に踏み散らされる人々の悲鳴、日々の要であるラズーンが撓みぎしんでいる音だったのだ。
そして、ユーノはレアナの身代わりとしてにせよ、セレドから遙か遠く、故国においては世界の果てと言われたラズーンへ、ただひたすら旅を続けて来た。この旅さえ済めば、世界を統べる府に辿り着きさえすれば、『何か』が明らかになる、『何か』の姿がはっきり見える、そう信じて。

（でも）
多くのものを重ね見るほど、目に見えない渦の中へ巻き込まれている自分が、垣間見えるような気がする。
ラズーンの崩壊、『運命（リマイン）』との戦い、『太皇（スーグ）』の交代、遙か昔に作り上げられ定められていた未来への流れ。

それらは宙道（シノイ）のように、数多くの背景を持ちながら、どれ一つとも関わらずにまっすぐある一点へと伸びている。
ひょっとすると、世界というものはそのように成り立っているのかも知れない。その辿り着く先を見ようとして、人は数限りなく生と死を繰り返すのかも知れない……。

「誰だ？」
ふいに、扉の向こうに熱を感じた。人の立ち止まった気配、誰何して剣に指を触れる。
もう、この公邸も安全ではないことをユーノは熟知している。ましてや、無防備に眠るレスファートを側に、一瞬たりともためらう気はない。

「私です」
「…ジノ？」
殺気が届いたのだろうか、扉の向こうの人物はすぐに答えを返した。抜き放ちかけていた剣を鞘に戻し、ユーノは扉の方へ向かう。気配は身動きしない。
レスファートを気にしながら、そっと扉を開け、薄暗い廊下に一人佇む相手の姿を認めた。

「どうしたの？」
まるで手酷く詰られることを覚悟しているような俯き方、それでもそろそろ顔を上げて、ジノは瞬いた。
「少しお尋ねしたいことが。……入ってもよろしいでしょうか」
「うん、いいけど……レスが眠ってる。そっと入って」

「はい」
ジノは頷き、しなやかな動きで扉の隙間から滑り込んできた。背後にリディノがいる気配はない。物音一つたえずに部屋に入ってきたジノに、ユーノは目を細める。

「前から気になっていたんだけど」
「はい」
「あなた、ただの詩人（うたびと）じゃないね？ つまり、ねっからの詩人（うたびと）じゃないだろ？」
「…お察しの通りです」

ジノは深い青の瞳に微笑をたたえた。月光の中では黒と見まごう色味が静かに瞼に隠される。
「九つの歳まで、地方の一都市で盗みまがいを生じておりました。ミダス公に拾われ、姫さまにお会いしてなければ、あのまま今も、日々を盗み暮らし、やがては捕まってくぶり殺されていたことでしょう」

「…そう」
ジノの何を認めてミダス公が愛娘の側に置く事を許したのか、それは想像するよりないけれど、おそらくはリディノが強く懇願したのだろう。重ねた年月の中で、ジノはリディノを唯一の主として仕えることを選んだ、

それが振舞いに見て取れる。

そのかけがえない主の側にいることなく、ジノは夜更けにユーノを訪ねてきている。何か事情があることなのだ、とユーノは察した。

「ところで、何の用？」

「……どうしても、お尋ねしたいことがあるのです」

再びあげてきた瞳は、光を吸い込んで重い。

「何？」

「アシャ様は、ひょっとして、あなた様を愛しておられるのではありませんか」

「っ」

びくり、と思わず体が震えた。どうしてそんな、そう考える心が千々に切れる。

そうであつたらよかつたのに。そうであるはずもないのに。そうではないのにどうしてそんな。

波立つ心に抗うユーノを、ジノはじっと凝視している。ふざけたり、からかったりしている表情ではない。

「まさか」

にじみ出てくる苦笑は、自分に対する自嘲。

これほど望みがないことを、それでもことば一つにまだ揺れる、自分の甘さ愚かしさ。

「アシャが好きなのは、レアナ姉さまだよ」

言い慣れた台詞は、何の苦労もなく口から零れた。夢の中でも現実でも、繰り返し繰り返し何度も何度も言い聞かせて来た、そのことば。

「私みたいなの、『あの』アシャが女扱いすると思う？」

肩を竦めて見せた、どれほどふざけた内容か理解してもらうために。

「ボクはアシャの弟分なの。そういう役割なんだ。アシャはとにかく綺麗な女性に目がないし。リディならまだしも、ボクは対象以前の問題だよ」

だが、ジノは笑わない。じっとユーノを見つめ続ける。

しばらくユーノのことばを胸の内でも反芻していたようだったが、納得しかねる口調でこう尋ねた。

「あなたはアシャ様をどう思われているのですか」

礼儀さえ排した、直接的、むしろ朴訥な問い。そして、曖昧なごまかしを許さない問い。

（さすが詩人（うたびと）だよな）

リディノに向けた、その忠誠にも感嘆する。瞳が静かに語っている、邪魔をするならこの場で斬る、と。

「アシャはね」

にいつ、とユーノは笑った。

「旅のいい仲間。剣の師匠。レアナ姉さまの想い人。そして、ゆくゆくは、ボクの兄になってくれる人」

「！」

ジノが息を呑む。

「リディには、悪いけど」

小さい頃からアシャの花嫁になることを夢見てきた、と話したリディノの、桜色の頬を思い出し、胸が痛んだ。

。「……その、おことば」

ジノも同様の思いだったのだろう、それでもなお、苦しげに問いを重ねる。

「嘘偽りはございませんか」

「こんなことに嘘をついても仕方ないだろ？ リディの気持ちは知ってる……嘘なんてつけない。……本当のことだよ」

（そうとも）

ユーノはアシャを愛してなどいない。好いてもいない。アシャはいい友人だ。いい仲間だ。

（何よりアシャがそう望んでいる）

嘘も、死ぬまで尽き続ければ本当になる。

そうして、今日かも知れない、明日かも知れない、この命が尽きた果てには、ユーノの想いはどこにも何も残らずに済むだろう。アシャはレアナと結ばれて、セレドの安寧を守るだろう。セレドは立派な王と女王に率いられて、美しく富み栄えてくれるだろう。ユーノの想いは誰一人知らぬまま、それを抱えてユーノは死出の旅へと出向くだろう。想いを封じ込めた魂を『死の女神』（イラークトル）に差し出すのだ。

「…」

ジノはなおも納得していない視線をこちらに向けたままだ。それでいいのか、そう問いかけている気がする。

お前はそれで、本当にいいのか。

口に出して重ねれば、虚構も真実に成り代わってしまうのだぞ。

（うん、いいんだ）

聴こえぬ問いにユーノは頷く。

（それで、いい）

「……そうですか」

ジノは再び目を伏せた。やがて、静かに頭を下げる。

「夜分遅くに失礼いたしました」

「構わないよ」

「おやすみなさいませ」

「うん、おやすみ」

ジノはしずしずと引き下がり、扉を閉めた。気配が廊下をゆっくりと遠ざかっていく。さっきより、足を引きずるような重さが加わった気がする。

その気配を感じながら、ユーノはもう一度、開け放った窓の向こうに目をやった。

（彼方の空の下、この世の果て、神々の住まうラズーンがあると、昔語りによく聞いた）

さわさわ、と遠い闇から葉鳴りがした。吹き込んでくる風の源を見つけようとするように、なおも夜に目を凝らしながら、ユーノは考えに耽る。

（ラズーンはこの世の統合府、神々は性を持たず、その果ての向こうには何もない……まるで幻の都のような気がしていた）

しかし、今はどうだろう。

ラズーンに辿り着き、その四大公の一人、ミダス公公邸にこうして住まってみると、セレドこそが、遠く幼

い日々に抱いた夢まぼろしのような気がしてくる。

(セレドのことばかりじゃない)

あれほど長かった旅さえも、一つ一つの場面は鮮明に心に焼きついているのに、いざそれを心の中から拾い上げてみれば、それらもまた、昔語りの一つのように、妙に遠いものになってしまっているようだ。

(『洗礼』を受けたせいかな。それとも、これが『思い出』というものなんだろうか)

脳裏をきららかな金と紫が駆け抜ける。

(そうしていつか、アシャのことも、こんな風に思い出になったなと考えられるようになるのだろうか)

それは、『いつかセレドに帰れるのだろうか』とか『帰り着くまで無事に生きていられるのだろうか』という問いと同じく、切なく儚い問いかけのような気がした。

(それともずっとこうやって、思い切れないまま、諦め切れないまま、思い続けていくのだろうか)

そんなのまるで女の子みたいじゃないか、と考え、一瞬目を見開いてくすりと笑った。

(女だったんだっけ、忘れてた)

「それでも…」

思わず声に漏れたのは、堪え切れぬ傷みのせいだろうか。

(それでも)

心の中で繰り返す。

(やり遂げなくちゃいけない、そう求められるなら……ううん)

軽く首を振って弱気を追い出し、前方の闇を見つめ直す。

(やり遂げられるはずだ、だって、他でもない、自分が選び取った道なんだから)

「…！」

ふいに、嵐の前の静けさに似た沈黙を守っていた彼方の空が、夜明けではない、どこか毒々しい紅にぼんやりと明るんだ。

(『運命(リメイン)』が……来る)

唐突に予感が広がった。

無意識に剣を探り、唇を引き締める。

「ゆ……の…」

その彼女の心象を受け取ったのか、ベッドでレスファートが小さく怯えたような声を上げた。

風はユーノに向かってきている。

『聖なる輪』(リーゾン)がわずかに熱を含む。

朱に染まった空の下、ギヌアの哄笑が、深く密やかに広がり始めたようだった。

第四部、終。

ラズーン12

<http://p.booklog.jp/book/97947>

著者 : segakiyui

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/segakiyui/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/97947>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97947>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ